

死者の書

折口信夫

青空文庫

彼の人の眠りは、徐かに覺めて行つた。まつ黒い夜の中に、更に冷え壓するものゝ澱んでゐるなかに、目のあいて來るのを、覺えたのである。

した　した　した。耳に傳ふやうに來るのは、水の垂れる音か。たゞ凍りつくやうな暗闇の中で、おのづと睫と睫とが離れて來る。膝が、肱が、徐ろに埋れてゐた感覺をとり戻して來るらしく、彼の人の頭に響いて居るもの――。全身にこはゞつた筋が、僅かな響きを立てゝ、掌・足の裏に到るまで、ひきつれを起しかけてゐ

るのだ。

さうして、なほ深い闇。ぼつちりと目をあいて見　　す瞳に、まづ
壓^{アツ}しかゝる黒い巖の天井を意識した。次いで、氷になつた岩牀^{ドコ}。
兩脇に垂れさがる荒岩の壁。したくと、岩^{イハツタ}傳ふ雫の音。

時がたつた——。眠りの深さが、はじめて頭に浮んで來る。長い
眠りであつた。けれども亦、浅い夢ばかりを見續けて居た氣がす
る。うつらくと思つてゐた考へが、現實に繋つて、ありくと、
目に沁みついてゐるやうである。

あゝ耳面^{ミ、モノトジ}刀白。

ヨミガハ
甦つた語が、彼の人の記憶を、更に弾力あるものに、響き返した。

耳面刀白。おれはまだお前を……思つてゐる。おれはきのふ、

こゝに來たのではない。それも、をとゝひや、其さきの日に、こゝに眠りこけたのでは、決してないのだ。おれは、もつと／＼長く寢て居た。でも、おれはまだ、お前を思ひ續けて居たぞ。耳ミ、モノトシ面ミ刀トシ白。こゝに來る前から……こゝに寢ても、……其から覺めた今まで、一續きに、一つ事を考へつめて居るのだ。

古い——祖先以來さうしたやうに、此世に在る間さう暮して居た——ナラハ習ナラハしからである。彼の人は、のくつと起き直らうとした。だが、筋々が斷キれるほどの痛みを感じた。骨の節々の挫けるやうな、疼イタきを覺えた。……さうして尚、ぢつと、——ぢつとして居る。ヌバタマ射干玉ヌバタマの闇。黒玉の大きな石壁に、刻み込まれた白々としたからだの様に、嚴かに、だが、すんなりと、手を伸べたまゝで居た。

耳面刀自の記憶。たゞ其だけの深い凝結した記憶。其が次第に蔓ヒロガつて、過ぎた日の様々な姿を、短い聯想の紐に貫いて行く。さうして明るい意思が、彼の人の死枯シニガれたからだに、再立ち直つて來た。

耳面刀自。おれが見たのは、唯一目——唯一度だ。だが、おまへのことを聞きわたつた年月は、久しかつた。おれによつて來い。耳面刀自。

記憶の裏から、反省に似たものが浮び出て來た。

おれは、このおれは、何處に居るのだ。……それから、こゝは何處なのだ。其よりも第一、此おれは誰ダレなのだ。其をすつかり、おれは忘れた。

だが、待てよ。おれは覺えて居る。あの時だ。鴨が聲ネを聞いたのだつけ。さうだ。譯語田ヲサダの家を引き出されて、磐余イハレの池に行つた。堤の上には、遠捲きに人が一ぱい。あしこの萱原、そこボサの矮叢から、首がつき出て居た。皆が、大きな喚オラび聲を、擧げて居たつけな。あの聲は残らず、おれをいとしがつて居る、半泣きの喚ワメき聲だつたのだ。

其でもおれの心は、澄みきつて居た。まるで、池の水だつた。あれは、秋だつたものな。はつきり聞いたのが、水の上に浮いてゐる鴨鳥ドリの聲コエだつた。今思ふと——待てよ。其は何だか一目惚れの女の哭き聲だつた氣がする。——を、あれが耳面刀自だ。其瞬間、肉體と一つに、おれの心は、急に締めあげられる

やうな刹那を、通つた気がした。俄かに、樂な廣々とした世間に、出たやうな感じが來た。さうして、ほんの暫らく、ふつとさう考へたきりで……、空も見ぬ、土も見ぬ、花や、木の色も消え去つた——おれ自分すら、おれが何だか、ちつとも訣らぬ世界のものになつてしまつたのだ。

あゝ、其時きり、おれ自身、このおれを、忘れてしまつたのだ。足の踝クルブシが、膝の膕ヒツカバミが、腰のつがひが、頸のつけ根が、顛顛コメカミが、ほんの窪が——と、段々上つて來るひよめきの爲に蠢いた。自然に、ほんの偶然強ばつたまゝの膝が、折り屈められた。だが、依然として——常闇トコヤミ。

を、さうだ。伊勢の國に居られる貴い巫女ミコ——おれの姉御ゴ。あ

のお人が、おれを呼び活けに来てゐる。

姉御。こゝだ。でもおまへさまは、尊い御神オンに仕へてゐる人だ。おれのからだに、觸サハつてはならない。そこに居るのだ。ちつとそこに、踏トマみ止つて居るのだ。——あゝおれは、死んでゐる。死んだ。殺されたのだ——忘れて居た。さうだ。此は、おれの墓だ。

いけない。そこを開アけては。塚の通ひ路の、扉をこじるのはおよし。……よせ。よさないか。

姉の馬鹿。

なあんだ。誰も、來ては居なかつたのだな。あゝよかつた。おれのからだテンピが、天日に暴サラされて、見るく、腐るところだつた。

だが、をかしいぞ。かうつと——あれは昔だ。あのこじあける音がするのも、昔だ。姉御の聲で、塚道の扉を叩きながら、言つて居たのも今の事——^{インマ}だつたと思ふのだが。昔だ。

おれのこゝへ來て、間もないことだつた。おれは知つてゐた。

十月だつたから、鴨が鳴いて居たのだ。其鴨みたいに、首を捻ぢちぎられて、何も訣らぬものになつたことも。かうつと——

姉御が、墓の戸で^{ワメ}喚いて、歌をうたひあげられたつけ。

「巖石^{イソウヘ}の上に生ふる馬^{アシビ}酔木を」と聞えたので、ふと、冬が過ぎ

て、春も^タ闌け初めた頃だと知つた。おれの骸^{ムクロ}が、もう半分融け

出した時分だつた。そのあと、「たをらめど……見すべき君がありと言はなくて」。さう言はれたので、はつきりもう、死ん

だ人間になつた、と感じたのだ。……其時、手で、今してる様にさはつて見たら、驚いたことに、おれのからだは、著こんだ著物の下で、^{ホジ、}腊のやうに、ペしやんこになつて居た——。

^{カヒナ}臂が動き出した。片手は、まつくらな空をさした。さうして、今一方は、そのまゝ、岩^{トコ}牀の上を搔き搜つて居る。

うつそみの人なる我や。明日よりは、^{フタカミ}二上山を愛兄弟と思はむ

^{ナキウタ}誄歌が聞えて來たのだ。姉御があきらめないで、も一つつぎ足して、歌つてくれたのだ。其で知つたのは、おれの墓と言ふものが、二上山の上にある、と言ふことだ。

よい姉御だつた。併し、其歌の後で、又おれは、何もわからぬ

ものになつてしまつた。

其から、どれほどたつたのかなあ。どうもよつぽど、長い間だつた氣がする。伊勢の巫女様、尊い姉御が来てくれたのは、居睡りの夢を醒された感じだつた。其に比べると、今度は深い睡りの後見^{アト}たいな氣がする。あの音がしてる。昔の音が――。

手にとるやうだ。目に見るやうだ。心を鎮めて――。鎮めて。

でない、この考へが、復散らかつて行つてしまふ。おれの昔が、ありくと訣つて來た。だが待てよ。……其にしても一體、こゝに居るおれは、だれなのだ。だれの子なのだ。だれの夫^{ツマ}なのだ。其をおれは、忘れてしまつてゐるのだ。

兩の臂は、頸の　り、胸の上、腰から膝をまさぐつて居る。さう

してまるで、生き物のするやうな、深い溜め息が洩れて出た。

大變だ。おれの著物は、もうすっかり朽つて居る。おれの禪ハカマは、ほこりになつて飛んで行つた。どうしろ、と言ふのだ。此おれは、著物もなしに、寢て居るのだ。

筋ばしるやうに、彼の人のからだに、血の馳けるに似たものが、過ぎた。肱を支へて、上半身が闇の中に起き上つた。

を、寒い。おれを、どうしろと仰るのだ。尊いおつかさま。おれが悪かつたと言ふのなら、あやまります。著物を下さい。著物を——。おれのからだは、地べたに凍りついてしまひます。

彼の人には、聲であつた。だが、聲でないものとして、消えてしまつた。聲でない語コトバが、何時までも續いてゐる。

くれる。おつかさま。著物がなくなつた。すつぽだかでて来た赤ん坊になりたいぞ。赤ん坊だ。おれは。こんなに、寢床の上を這ひずり　つてゐるのが、だれにも訣らぬのか。こんなに、手足をばた／＼やつてゐるおれの、見える奴が居ぬのか。

その唸き聲のとほり、彼の人の骸は、まるでだゞをこねる赤子のやうに、足もあがゞに、身あがきをば、くり返して居る。明りのさゝなかつた墓穴の中が、時を経て、薄い氷の膜ほど透けてきて、物のたゞずまひを、幾分臙ろに、見わけることが出来るやうになつて来た。どこからか、月光とも思へる薄あかりが、さし入つて来たのである。

どうしよう。どうしよう。おれは。——大刀までこんなに、鏑

びついてしまつた……。

二

月は、依然として照つて居た。山が高いので、光りにあたるものが少かつた。山を照し、谷を輝かして、剩る光りは、又空に跳ね返つて、残る隈々までも、鮮やかにうつし出した。

足もとには、澤山の峰があつた。黒ずんで見える峰々が、入りくみ、絡みあつて、深々と畝つてゐる。其が見えたり隠れたりするのは、この夜更けになつて、俄かに出て來た霞の所爲だ。其が又、此冴えざえとした月夜をほつとりと、暖かく感じさせて居る。

廣い端山ハヤマムラガの群つた先サキは、白い砂の光る河原だ。目の下遠く續いた、
 輝く大佩帶オホオビは、石川である。その南北に涉つてゐる長い光りの筋
 が、北の端で急に廣がつて見えるのは、凡河内オホシカフチの邑のあたりで
 あらう。其へ、山間アヒを出たばかりの堅鹽川カタシホ―大和川―が落ちあ
 つて居るのだ。そこから、乾イヌキの方へ、光りを照り返す平面が、幾
 つも列つて見えるのは、日下江クサカエ・永瀬江ナガセエ・難波江ナニハエなどの水面であ
 らう。

寂かな夜である。やがて鶏鳴近い山の姿は、一樣に露に濡れたや
 うに、しつとりとして靜まつて居る。谷にちらくする雪のやう
 な輝きは、目の下の山田谷に多い、小櫻の遅れ咲きである。
 一本の路が、眞直に通つてゐる。二上山の男嶽ヲノカミ・女嶽メノカミの間か

ら、急に降^{サガ}つて來るのである。難波^{ナニハ}から飛鳥^{アスカ}の都への古い間道なので、日によつては、晝は相應な人通りがある。道は白々と廣く、夜目には、芝草の蔓^ハつて居るのすら見える。當麻路^{タギマヂ}である。一降りして又、大降^{クダ}りにかゝらうとする處が、中だるみに、やゝ垣^{ヒラタ}くなつてゐた。梢の尖つた栢^{カハ}の木の森。半世紀を経た位の木ぶりが、一様に揃つて見える。月の光りも薄い木陰全體が、勾配を背負つて造られた圓塚であつた。月は、瞬きもせずに照し、山々は、深くを閉ぢてゐる。

こう　　こう　　こう。

先刻^{サツキ}から、聞えて居たのかも知れぬ。あまり寂けさに馴れた耳は、
 新な聲を聞きつけよう、としなかつたのであらう。だから、今珍

しく響いて來た感じもないのだ。

こう　こう　こう——こう　こう　こう　こう。

確かに人聲である。鳥の夜聲とは、はつきりかはつた韻ヒツキを曳いて來る。聲は、暫らく止んだ。靜寂は以前に増し、冴え返つて張りきつてゐる。この山の峰つゞきに見えるのは、南に幾重ともなく重つた、葛城の峰々である。伏フシゴエ越・櫛羅クシラ・小巨勢コバセと段々高まつて、果ては空の中につき入りさうに、二上山と、この塚にのしかゝるほど、眞黒に立ちつゞいてゐる。

當麻路をこちらへ降つて來るらしい影が、見え出した。二つ三つ五つ……八つ九つ。九人の姿である。急な降りを一氣に、この河内路へ馳けおりて來る。

九人と言ふよりは、九柱の神であつた。白い著物・白い鬘カツラ、手は、足は、すべて旅の装束イデタチである。頭より上に出た杖について――。この坦タヒラに來て、森の前に立つた。

こう　　こう　　こう。

誰の口からともなく、一時に出た叫びである。山々のこだまは、驚いて一様に、忙しく聲を合せた。だが、山は、忽一時の騷擾から、元の緘黙シムマに戻つてしまつた。

こう。　　こう。　　お出でなされ。藤原南家郎女ナンケイラツメの御魂ミタマ。

こんな奥山に、迷うて居るものではない。早く、もとの身に返れ。　　こう　　こう。

お身さまの魂タマを、今、山たづね尋ねて、尋ねあてたおれたちぞ

よ。こう　こう　こう　こう。

九つの杖びとは、心から神になつて居る。彼らは、杖を地に置き、鬘を解いた。鬘は此時、唯眞白な布に過ぎなかつた。其を、長さの限り振り捌いて、一様に塚に向けて振つた。

こう　こう　こう。

かう言ふ動作をくり返して居る間に、自然な感情の鬱屈と、休息を欲するからだの疲れとが、九體の神の心を、人間に返した。彼らは見る間に、白い布を頭に捲きこんで鬘とし、杖を手にとつた旅人として、立つてゐた。

をい。無言シギマツトの勤めツトも此までぢや。

を。

八つの聲が答へて、彼等は訓練せられた所作のやうに、忽一度に、草の上に寛クツロぎ、再杖を横へた。

これで大和も、河内との境ぢやで、もう魂ギヤウごひの行もすんだ。
今時分は、郎女さまのからだは、廬イホリの中で魂をとり返して、ぴちく／＼しく居られようぞ。

こゝは、何處だいの。

知らぬかいよ。大和にとつては大和の國、河内にとつては河内の國オホゼキの大關。二上タギマチの當麻路セキの關——。

別の長老トネめいた者が、説明を續ツいだ。

四五十年あとまでは、唯關と言ふばかりで、何の標シルシもなかつた。其があつた、近江の滋賀の宮に馴染み深かつた、其よ。大和では、

磯城シキの譯語田ヲサダの御館ミタチに居られたお方。池上の堤で命召されたあのお方の骸ムクロを、罪人に殯モガリするは、災の元と、天若日子アメワカヒコの昔語りイに任せて、其まゝ此處にお搬びなされて、お埋イけになつたのが、此塚よ。

以前の聲が、まう一層皺がれた響きで、話をひきとつた。

其時の仰せには、罪人よ。吾子ワコよ。吾子の爲シラフ了せなんだ荒アラび心で、吾子よりももつと、わるい猛び心を持つた者の、大和に來向ふのを、待ち押へ、塞サへ防いで居ろ、と仰せられた。

ほんに、あの頃は、まだおれたちも、壯ワカザカ盛りぢやつたに。今ではもう、五十年昔になるげな。

今一人が、相談でもしかける様な、口ぶりを挿んだ。

さいや。あの時も、墓作りに雇はれた。その後も、當麻路の修覆に召し出された。此お墓の事は、よく知つて居る。ほんの苗木ぢやつた栢カヘが、此ほどの森になつたものな。畏コハかつたぞよ。此墓のみ魂タマが、河内安宿部アスカベから石擔モちに來て居た男に、憑いた時はなう。

九人は、完全に現ウツし世の庶民の心に、なり還つて居た。山の上は、昔語りするには、あまり寂しいことを忘れて居たのである。時の更け過ぎた事が、彼等の心には、現實にひしくくと、感じられ出したのだらう。

もう此でよい。戻らうや。

よかる よかる。

皆は、鬢をほどき、杖を棄てた白衣の修道者、と言ふだけの姿ナリになつた。

だかの。皆も知つてようが、このお塚は、由緒ユキシヨフカ深い、氣のおける處ゆゑ、まう一度、魂タマごひをしておくまいか。

トネ長老の語と共に、修道者たちは、再魂タマヨバ呼ひの行ギヤウを初めたのである。

こう　こう　こう。

を……。

異様な聲を出すものだ、と初めは誰も、自分らの中の一人を疑ひ、其でも變に、おぢけづいた心を持ちかけてゐた。も一度、

こう　こう　こう。

其時、塚穴の深い奥から、氷りきつた、而も今息を吹き返したばかりの聲が、明らかに和したのである。

をうう……。

九人の心は、ばら／＼の九人の心々であつた。からだも亦ちり／＼に、山田谷へ、竹内谷へ、大阪越えへ、又當麻路へ、峰にちぎれた白い雲のやうに、消えてしまつた。

唯疊まつた山と、谷とに響いて、一つの聲ばかりがする。

をうう……。

萬法藏院の北の山陰に、昔から小な庵室があつた。昔からと言ふのは、村人がすべて、さう信じて居たのである。荒廢すれば繕ひくくして、人は住まぬ廬イホリに、孔雀明王像が据ゑてあつた。當麻タギマの村人の中には、稀に、此が山田寺である、と言ふものもあつた。さう言ふ人の傳へでは、萬法藏院は、山田寺の荒れて後、飛鳥の宮の仰せを受けてとも言ひ、又御自身の御發起ゴホツキからだとも言ふが、一人の尊いみ子が、昔の地を占めにお出でなされて、大伽藍を建てさせられた。其際、山田寺の舊構を残すため、寺の四至の中、北の隅へ、當時立ち朽りになつて居た堂を移し、規模を小さくして造られたもの、と傳へ言ふのであつた。

さう言へば、山田寺は、役君エノキミ小角ヲツヌが、山林佛教を創める最初の足代アシノロになつた處だと言ふ傳へが、吉野や、葛城の山ヤマ伏フシ行人シギヤウニンの間に行はれてゐた。何しろ、萬法藏院の大伽藍が焼けて百年、荒野の道場となつて居た、目と鼻との間に、こんな古い建て物が、残つて居たと言ふのも、不思議なことである。

夜は、もう更けて居た。谷川の激タギちの音が、段々高まつて來る。二上山の二つの峰の間から、流れくだる水なのだ。

廬の中は、暗かつた。爐を焚くことの少い此邊ヘンでは、地下ヂゲ百姓は、夜は眞暗な中で、寝たり、坐つたりしてゐるのだ。でもこゝには、本尊が祀つてあつた。夜を守つて、佛の前で起き明す爲には、御ミ燈アカシを照した。

孔雀明王の姿が、あるかないかに、ちろめく光りである。

姫は寝ることを忘れたやうに、坐つて居た。

萬法藏院の上座の僧綱たちの考へでは、まづ奈良へ使ひを出さね

ばならぬ。横佩家ヨコハキケの人々の心を、思うたのである。次には、女

人結界ケツカイを犯して、境内深く這入つた罪は、郎女自身に贖アガナはさね

ばならなかつた。落慶のあつたばかりの淨域だけに、一時は、塔タ

ツチユウ頭ツチユウ々々の人たちの、青くなつたのも、道理である。此は、財

物を施入する、と謂つたぐらゐではすまされぬ。長期の物忌みを、

寺近くに居て果させねばならぬと思つた。其で、今日晝の程、奈

良へ向つて、早使ハヤツカひを出して、郎女イラツメの姿が、寺中に現れたゆ

くたてを、仔細に告げてやつたのである。

其と共に姫の身は、此庵室に暫らく留め置かれることになつた。たとひ、都からの迎へが來ても、結界を越えた贖ひを果す日數だけは、こゝに居させよう、と言ふのである。

牀は低いけれども、かいてあるにはあつた。其替り、天井は無上に高く、而も萱のそゝけた屋根は、破風の脇から、むき出しに、空の星が見えた。風が唸つて過ぎたと思ふと、其高い隙から、どつと吹き込んで來た。ばら／＼^{イットキ}落ちかゝるのは、煤がこぼれるのだらう。明王の前の灯が、一時^{イットキ}かつと明るくなつた。

その光りで照し出されたのは、あさましく荒んだ座敷^{スサ}だけでなかつた。荒板の牀の上に、薦^{コモムシロ}筵^{シロ}二枚重ねた姫の座席。其に向つて、ずつと離れた壁^{デカ}ぎはに、板敷に直に坐つて居る老婆の姿があ

つた。

壁と言ふよりは、壁カベシロ代であつた。天井から吊りさげたタツゴモ豎薦が、幾枚も幾枚も、ちぐはぐに重つて居て、どうやら、風は防ぐやうになつて居る。その壁代に張りついたやうに坐つて居る女、先からシハブキ嗽一つせぬ静けさである。

貴族の家の郎女は、一日もの言はずとも、寂しいとも思はぬ習慣がついて居た。其で、この山陰の一つ家に居ても、溜め息一つ洩すのではなかつた。晝ヒの内此處へ送りこまれた時、一人の姥のついで來たことは、知つて居た。だが、あまり長く音も立たなかつたので、人の居ることは忘れて居た。今ふつと明るくなつた御ミアカ燈シの色で、その姥の姿から、顔まで一目で見た。どこやら、覺

えのある人の氣がする。さすがに、姫にも人懐しかつた。ようべ家を出てから、女ニヨシヤウ性には、一人も逢つて居ない。今そこに居る姥ウバが、何だか、昔の知り人のやうに感じられたのも、無理はないのである。見覚えのあるやうに感じたのは、だが、其親しみ故だけではなかつた。

郎イラツメ女さま。

緘シヅマ黙を破つて、却てももの寂しい、乾カラゴエ聲が響いた。

郎女は、御存じおざるまい。でも、聽いて見る氣はおありかえ。お生れなさらぬ前の世からのことを。それを知つた姥でおざるがや。

一旦、口がほぐれると、老女は止めどなく、喋り出した。姫は、

この姥の顔に見知りのある氣のした訣を、悟りはじめて居た。藤原南家ナンケにも、常々、此年よりとおなじやうな媼オムナが、出入りして居た。郎女たちの居る女部屋ワンナベヤまでも、何時もづか／＼這入つて来て、憚りなく古物語りを語つた、あの中臣ナカトミノシヒノオムナ志斐媼——。

あれと、おなじ表情をして居る。其も、尤であつた。志斐老女が、藤氏トウシの語部カタリベの一人であるやうに、此も亦、この當麻タギマの村の舊族、當麻真人マヒトの「氏ウヂの語部カタリベ」、亡び残りの一人であつたのである。

藤原のお家が、今は、四筋に分れて居ります。ぢやが、大織冠さまの代どころでは、ありは致しませぬ。淡海公の時も、まだ一流れのお家でおざりました。併し其頃やはり、藤原は、中臣と二つの筋に岐れました。中臣の氏人で、藤原の里に榮えら

れたのが、藤原と、家名の申され初めでおざりました。

藤原のお流れ。今ゆく先も、クゲセフロク公家攝籙の家柄。中臣の筋や、お

ん神仕へ。差別ケヂメ々々明らかに、御代ミヨ々々の宮守マモり。ぢやが、今

は今、昔は昔でおざります。藤原の遠オヤつ祖、中臣の氏の神、天ア

メノオシクモネ押雲根と申されるお方の事は、お聞き及びかえ。

今、奈良の宮におざります日の御子さま。其前は、藤原の宮の

日のみ子さま。又其前は、飛鳥アスカの宮の日のみ子さま。大和の國ク

ニナカ中に、宮遷し、宮奠サダめ遊ユした代々の日のみ子さま。長く久し

い御代ミヨ々々に仕へた、中臣の家の神業ワザ。郎イラツメ女さま。お聞き及

びかえ。

遠い代の昔語り。耳明らめてお聞きなされ。中臣・藤原の遠つ

祖^{オヤ}あめの押雲根命^{オシクモネ}。遠い昔の日のみ子さまのお喰^メしの、飯^{イヒ}と、
 み酒^キを作る御料の水を、大和國^{クニナカ}中^{ナカ}残る隈なく搜^{モト}し覓^メめました。
 その頃、國原の水は、水澁^{ソブ}臭^{ニホ}く、土濁^{ツチ}りして、日のみ子さまの
 お喰^メしの料^{シロ}に叶^ヒひません。天^{テン}の神高天^{タカマ}の大御祖^{オホミオヤ}教^{ノチ}へ給^{タマ}へと祈^{イノ}
 らうにも、國中^{ナカ}は國低^{クニヒ}し。山々もまんだ天^{テン}遠^{トホ}し。大和の國とり
 圍む青垣山では、この二上山。空行く雲の通^{カヨ}ひ路^ヂと、昇^{ノボ}り立^タつ
 て祈^{イノ}りました。その時、高天^{タカマ}の大御祖^{オホミオヤ}のお示^シしで、中臣^{ナカノミ}の祖^{オヤ}
 押雲根命^{オシクモネ}、天の水の湧^ワき口^{グチ}を、此二上山^ヤに八^ヤと^ハころまで見^ミとゞ
 けて、其後久しく、日のみ子さまのおめしの湯水は、代々の中
 臣自身、此山へ汲みに參ります。お聞き及びかえ。

當^{タギ}麻^マ眞^マ人^{ヒト}の、氏の物語りである。さうして其が、中臣の神わざ

と繋りのある點を、座談のやうに語り進んだ姥は、ふと口をつぐんだ。

外には、瀬音が荒れて聞えてゐる。中臣・藤原の遠祖が、アメノフ天二タカミ上アメノヤキに求めた天八井の水を集めて、峰を流れ降り、岩にあたつて漲り激つ川なのであらう。瀬音のする方に向いて、姫は、タナソコ掌を合せた。

併しやがて、ふり向いて、仄暗くさし寄つて來てゐる姥の姿を見た時、言はうやうない畏しさと、せつかれるやうな忙しさを、一つに感じたのである。其に、志斐姥の、本式に物語りをする時の表情が、此老女の顔にも現れてゐた。今、タギマ當麻の語部カタリベの姥は、ウバ神憑りに入るらしく、わななく震ひはじめて居るのである。

ひさかたの
 我^アが登り
 とぶとりの
 ふる里の
 家どころ
 豊^{ユタ}にし
 彌^{イヤ}彼^{ラチ}方に
 藤原の

四

天^{アメ}二^{フタ}上^{カミ}に、
 見れば、
 明日^{アスカ}香
 神^{カム}南^ナ備^ビ山^ゴ隠^モり、
 多^{サハ}に見え、
 屋^{ヤニハ}庭^ハは見ゆ。
 見ゆる家^{イヘム}群^{ムラ}
 朝^{アソ}臣^ソが宿。

遠々に

我^アが見るものを、

たか／＼に

我^アが待つものを、

處^{ヲトメゴ}女子は

出で通ぬものか。

よき耳^{ミミ}を

聞かさぬものか。

青馬の

耳^{ミミ}面^{モノ}刀^{トジ}自。

刀自もがも。

女^{オト}弟もがも。

その子の

はらからの子の

處女子の

一人

一人だに、

わが配^{ツマ}偶^マに來^コよ。

ひさかたの アメフタカミ
天二上

二上の陽面カゲトモに、

生ひをゝり 繁シみ咲く

馬酔木アシビの にはへる子を

我アが 捉トり兼ねて、

馬酔木の あしずりしつゝ

吾アはもよ偲シヌぶ。藤原處女

歌ひ了へた姥は、大息をついて、ぐつたりした。其から暫らく、山のそよぎ、川瀬の響きばかりが、耳についた。

姥は居すまひを直して、嚴コワかな聲音ネで、誦カり出タした。

とぶとりの 飛鳥の都に、日のみ子様のおそば近く侍る尊いおん方。さゝなみの大津の宮に人となり、モロコシ唐土の學藝ザエに詣り深く、カラウタ詩も、此國ではじめて作られたは、大友皇子か、其とも此お方か、と申し傳へられる御方。オンカタ

近江の都は離れ、飛鳥の都の再榮えたその頃、あやまちもあやまち。日のみ子に弓引くたくみ、恐しや、企てをなされると言ふ噂が、立ちました。

タカマノハラヒロヌヒメノミコト

高天原廣野姫尊、おん怒りをお發しになりました、とう／＼池上の堤に引き出して、お討たせになりました。

其お方がお死キハにの際ミ、モトジに、深く／＼思ひこまれた一人のお人がおざります。耳面刀ミ、モトジ自と申す、大織冠のお娘御でおざります。

前から深くお思ひになつて居た、と云ふでもありません。唯、此郎女も、大津の宮離れの時に、都へ呼び返されて、寂しい暮しを續けて居られました。等しく大津の宮に愛着をお持ち遊した右の御方が、愈々、磐余イハレの池の草の上で、お命召されると言ふことを聞いて、一目見てなごり惜しみがしたくて、こらへられなくなりました。藤原から池上まで、おひろひでお出でになりました。小高い柴の一むらある中から、御様子を窺うて歸らうとなされました。其時ちらりと、かのお人の、最期に近いお目に止りました。其ひと目が、此世に残る執心となつたのでおざります。

もゝつたふ 磐余イハレの池に鳴く鴨を 今日のみ見てや、雲隠り

なむ

この思ひがけない心残りを、お詠みになつた歌よ、と私ども當^タ麻^{ギマ}の語^{カタリベ}部の物語りには、傳へて居ります。

その耳面刀自と申すは、淡海公の妹君、郎女の祖父^{オホヂ}父^{ナシケ}君^{ダイジ}南家太^{ダイジ}政^{ヤウ}大臣には、叔母君にお當りになつてゝおざりまする。

人間の執^{シフシン}心と言ふものは、怖^{コハ}いものとはお思ひなされぬかえ。

其亡き骸は、大和の國を守らせよ、と言ふ御諛^{ウケ}で、此山の上、

河内から來る當麻路の脇にお埋^イけになりました。其^{ナシ}が何と、此

世の惡心も何もかも、忘れ果て、清^{スガ}々しい心になりながら、

唯そればかりの一念が、残つて居る、と申します。藤原四流の

中で、一番美しい郎女が、今におき、耳面刀自と、其^{カクリヨ}幽^ヨ界^ヨの

目には、見えるらしいのでおざります。女盛りをまだ婿どりなさらぬげの郎女さまが、其力におびかれて、この當麻タキマまでお出でになつたのでなうて、何でおざりませう。

當麻路に墓を造りましたソノカミ當時、石を搬ぶ若い衆にのり移つたタマ靈が、あの長歌を謳うた、と申すのが傳へ。

當麻タギマノカタリノオムナ語部カ媪は、南家の郎女の脅える様を想像しながら、物語つて居たのかも知れぬ。唯さへ、この深夜、場所も場所である。如何に止めどなくなるのが、「ひとり語りガタ」の癖とは言へ、語部フルババの古婆の心は、自身も思はぬ意地くね悪さを藏してゐるものである。此が、神さびた職を寂しく守つて居る者の優越感を、充すことにも、なるのであつた。

大貴族の郎女は、人の語を疑ふことは教へられて居なかつた。それに、信じなければならぬもの、とせられて居た語部の物語りである。詞の端々までも、眞實を感じて、聽いて居る。

言ふとほり、昔びとの宿^{シユクシフ}執^{シフ}が、かうして自分を導いて來たことは、まことに違ひないであらう。其にしても、つひしか見ぬお姿——尊い御佛と申すやうな相好が、其お方とは思はれぬ。

春秋の彼岸中日、入り方の光り輝く雲の上に、まぎ／＼と見たお姿。此日本^{ヤマト}の國の人とは思はれぬ。だが、自分のまだ知らぬこの國の男子^{ヲノコ}たちには、あゝ言ふ方もあるのか知らぬ。金色^{コンジキ}の鬢、金色の髪の豊かに垂れかゝる片肌は、白々と袒^ヌいで美しい肩。ふくよかなお顔は、鼻隆く、眉秀で夢見るやうにまみを伏せて、

右手は乳の邊に擧げ、脇の下に垂れた左手は、ふくよかな掌を見せて……あゝ雲の上に朱の唇、匂ひやかにほゝ笑まれると見た……その涕。

日のみ子さまの御側仕へのお人の中には、あの様な人もおいでになるものだらうか。我が家の父や、兄人たちも、世間の男たちとは、とりわけてお美しい、と女たちは噂するが、其すら似もつかぬ……。

尊い女ニヨシヤウ性は、下賤な人と、口をきかぬのが當時の世の掟である。何よりも、其語は、下ざまには通じぬもの、と考へられてゐた。それでも、此古物語りをする姥には、貴族の語もわかるであらう。郎女は、恥ぢながら問ひかけた。

その人。ものを聞かう。此身の語が、聞きとれたら、答へし
ておくれ。

その飛鳥の宮の日のみ子さまに仕へた、と言ふお方は、昔の罪
びとらしいに、其が又何とした訣で、姫の前に立ち現れては、
神々カウミしく見えるであらうぞ。

此だけの語が言ひ淀み、淀みして言はれてゐる間に、姥は、郎女
の内に動く心もちの、凡は、氣ケどつたであらう。暗いみ燈アカシの光り
の代りに、其頃は、もう東白みの明りが、部屋の内の物の形を、
朧ろげに顯しはじめて居た。

我が説コトワケ明を、お聞きわけられませ。神代の昔びと、天若日子アメワカヒコ。
天若日子こそは、天テンの神々に弓引いた罪ある神。其すら、其後ゴ、

人の世になつても、氏貴い家々の娘御ゴの閨ネヤの戸までも、忍びよると申します。世に言ふ「天アメ若ワカみこ」と言ふのが、其でおざります。

天若みこ。物語りにも、うき世ヨガタ語りにも申します。お聞き及びかえ。

姥は暫らく口を閉ぢた。さうして言ひ出した聲は、顔にも、年も似ず、一段、はなやいで聞えた。

「もゝつたふ」の歌、残された飛鳥の宮の執シツシン心シンびと、世々の藤原の一イチの媛メに崇る天若みこも、顔清く、聲心惹く天若みこのやはり、一人でおざります。

お心つけられませ。物語りも早、これまで。

其まゝ石のやうに、老女はぢつとして居る。冷えた夜も、朝影アサカゲを感じる頃になると、幾らか温みがさして來る。

萬法藏院は、村からは遠く、山によつて立つて居た。曉早い鷄の聲も、聞えぬ。もう梢を離れるらしい埒鳥が、近い端山ハヤマの木群コムラで、羽振ハフきの音を立て初めてゐる。

五

おれは活イきた。

闇い空間は、明りのやうなものを漂してゐた。併し其は、蒼黒い靄の如く、たなびくものであつた。

巖ばかりであつた。壁も、牀トコも、梁ハリも、巖であつた。自身のからだすらが、既に、巖になつて居たのだ。

屋根が壁であつた。壁が牀であつた。巖ばかり——。觸サハつても觸つても、巖ばかりである。手を伸すと、更に堅い巖が、掌に觸れた。脚をひろげると、もつと廣い磐バンジャク石オモニテの面が、感じられた。纒イトかにさす薄光りも、黒い巖石が皆吸ひとつたやうに、岩窟イハムロの中に見えるものはなかつた。唯けはひ——彼の人の探り歩くらしい空氣の微動があつた。

思ひ出したぞ。おれが誰だつたか、——訣つたぞ。

おれだ。此おれだ。大津の宮に仕へ、飛鳥の宮に呼び戻されたおれ。滋賀津彦シガツヒコ。其が、おれだつたのだ。

歡びの激情を迎へるやうに、岩窟イハムロの中のすべての突角タケが哮びの反響をあげた。彼の人は、立つて居た。一本の木だつた。だが、其姿が見えるほどの、はつきりした光線はなかつた。明りに照し出されるほど、纏ウツつた現ミし身をも、持たぬ彼カの人であつた。唯、岩屋の中に蠹シユクリツ立した、立ち枯れの木に過ぎなかつた。

おれの名は、誰も傳へるものがない。おれすら忘れて居た。長く久しく、おれ自身にすら忘れられて居たのだ。可愛イトしいおれの名は、さうだ。語り傳へる子があつた筈だ。語り傳へさせる筈カタリベの語部も、出來て居たゞらうに。——なぜか、おれの心は寂しい。空虚な感じが、しくくと胸を刺すやうだ。

——子代コシロも、名代ナシロもない、おれにせられてしまつたのだ。さう

だ。其に違ひない。この物足らぬ、大きな穴のあいた氣持ちは、其で、するのだ。おれは、此世に居なかつたと同前の人間になつて、現^{ウツ}し身の人間どもには、忘れ^{ヲフ}了されて居るのだ。憐みのないおつかさま。おまへさまは、おれの妻の、おれに殉死^{トモジ}にするのを、見殺しになされた。おれの妻の生んだ粟津^{アハツコ}子は、罪びとの子として、何處かへ連れて行かれた。野山のけだもの、餌^エ食^{ジキ}に、くれたのだらう。可愛さうな妻よ。哀なむすこよ。

だが、おれには、そんな事などは、何でもない。おれの名が傳らない。劫^{ゴフシヨ}初から末代まで、此世に出ては消える、天^{アメ}の下の青人草^{アヲヒトグサ}と一列に、おれは、此世に、影も形も残さない草の葉になるのは、いやだ。どうあつても、不承知だ。

恵みのないおつかさま。お前さまにお継りするにも、其おまへ
さますら、もうおいでがない此世かも知れぬ。

くそ——^{ソト}外の世界が知りたい。世の中の様子が見たい。

だが、おれの耳は聞える。其なのに、目が見えぬ。この耳すら、
世間の語を聞き別けなくなつて居る。闇の中にばかり瞑つて居
たおれの目よ。も一度くわつと睜いて、^{ミヒラ}現し世のありのまゝを
うつしてくれ、……土龍の目など、おれに貸しをれ。

聲は再、寂かになつて行つた。獨り言する其聲は、彼の人の耳に
ばかり聞えて居るのであらう。

丑刻に、^{ウシ}静謐の頂上に達した^{ウツ}現し世は、^ヨ其が過ぎると共に、俄か
に物音が起る。月の、空を行く音すら聞えさうだつた四方の山々

の上に、まづ木の葉が音もなくうごき出した。次いではるかな谿のながれの色が、白々と見え出す。更に遠く、大和國クニナカ中の、何處からか起る一番鷄のつくるとき。

曉が來たのである。里々の男は、今、女の家ネヤドの閨戸から、ひそ／＼と歸つて行くだらう。月は早く傾いたけれど、光りは深夜の色を保つてゐる。午前二時に朝の來る生活に、村びとも、宮びとも忙しいとは思はずに、起きあがる。短い曉の目覺めの後、又、物に倚りかゝつて、新しい眠りを繼ぐのである。

山風は頻りに、吹きおろす。枝・木の葉の相軋ヒシめく音が、やむ間なく聞える。だが其も暫らくで、山は元のひつそとしたけしきに還る。唯、すべてが薄暗く、すべてが隈を持つたやうに、朧ろに

なつて來た。

岩窟イハムロは、沈々と黝クラくなつて冷えて行く。

した。した。水は、岩肌を絞つて垂れてゐる。

耳面ミ、モノトシ刀自。おれには、子がない。子がなくなつた。おれは、そ

の榮えてゐる世の中には、跡を貽ノコして來なかつた。子を生んでくれ。おれの子を。おれの名を語り傳へる子どもを――。

岩牀ドコの上に、再白々と横つて見えるのは、身じろきもせぬからだである。唯その眞裸な骨の上に、鋭い感覺ばかりが生きてゐるのであつた。

まだ反省のとり戻されぬむくろには、心になるものがあつて、心はなかつた。

耳面刀自の名は、唯の記憶よりも、更に深い印象であつたに違ひはない。自分すら忘れきつた、彼の人の出来あがらぬ心に、骨に沁み、干からびた髓の心までも、唯彫りつけられたやうになつて、残つてゐるのである。

萬法藏院の晨朝ジンテウの鐘だ。夜の曙色アケイロに、一度騒立サワダつた物々の胸をおちつかせる様に、鳴りわたる鐘の音ネだ。一ぱし白みかゝつて來た東は、更にほの暗い明け昏れアグの寂けさに返つた。

南家の郎女は、一莖の草のそよぎでも聴き取れる曉アカツキナ 風キナぎを、

自身擾すことをすまいと言ふ風に、身じろきすらもせずドに居る。

夜のヨル間マよりも暗くなつた廬イホリの中では、明王像の立ち處ドさへ見定め

られぬばかりになつて居る。

何處からか吹きこんだ朝山嵐オロシに、御燈アカシが消えたのである。當麻語タギマカ

部の姥タリも、薄闇に蹲つて居るのであらう。姫は再、この老女の事を忘れてゐた。

たゞ一刻ばかり前、這入りの戸を揺つた物音があつた。一度二度三度。更に數度。音は次第に激しくなつて行つた。樞がまるで、おしちぎられでもするかと思ふほど、音に力のこもつて來た時、ちようど、鶏が鳴いた。其きりびつたり、戸にあたる者もなくなつた。

新しい物語が、一切、語部の口にのぼらぬ世が來てゐた。けれど

も、カタクナ頑なタギマウヂ當麻氏の語部のフルウバ古姥の爲に、我々は今一度、去年以來の物語りをしておいても、よいであらう。まことに其は、キツ昨日からはじまるのである。

六

門をはひると、俄かに松風が、吹きあてるやうに響いた。

一町も先に、固まつて見える堂伽藍——そこまでずつと、砂地である。

白い地面に、廣い葉の青いまゝでちらばつて居るのは、朴の木だ。まともに、寺を壓してつき立つてゐるのは、フタカミヤマ二上山である。其

眞下にネハンブツ 槃佛のやうな姿に横つてゐるのが麻呂子山だ。其頂が

やつと、講堂の屋の棟に、乗りかゝつてゐるやうにしか見えない。

こんな事を、女ニヨニン人の身で知つて居る訣はなかつた。だが、俊敏

な此旅びとの胸に、其に似たほのかな綜合の、出来あがつて居たのは疑はれぬ。暫らくの間、その薄緑の山色を仰いで居た。其から、朱塗りの、激しく光る建て物へ、目を移して行つた。

此寺の落慶供養のあつたのは、つい四五日前アトであつた。まだあの日の喜ばしい騒ぎトヨの響みが、どこかにする様に、麓の村びと等には、感じられて居る程である。

山嵐オロシに吹き暴サラされて、荒草深い山裾の斜面に、萬法藏マンホフザウケン院の細

々とした御燈ミアカシの、煽られて居たのに目馴れた人たちは、この幸

福な轉テンペン變ベンに、目を睜つて居るだらう。此郷に田ナリドコロ莊コロを残して、

奈良に數代住みついた豪族の主人も、その日は、歸つて來て居た
つけ。此は、天竺の狐の爲わざではないか、其とも、この葛城郡
に、昔から残つてゐる幻術師マボロシのする迷はしではないか。あまり莊シ
ヤウゴン

嚴エンを極めた建て物に、故知らぬ反感まで唆られて、廊を踏み
鳴し、柱を叩いて見たりしたのも、その供トモ人ヒトのうちにはあつ
た。

數年前の春の初め、野燒きの火が燃えのぼつて來て、唯一宇あつ
た萱堂カヤダウが、忽痕もなくなつた。そんな小な事件が起つて、注意
を促してすら、そこに、曾ウルハて美しい福田と、寺の創められた代ヨを、
思ひ出す者もなかつた程、それはく、微かな遠い昔であつた。

以前、疑ひを持ち初める里の子どもが、其堂の名に、不審を起した。當麻タギマの村アスカベゴホリにありながら、山田寺ヤマダと言つたからである。山の背ウシロの河内の國安宿部郡の山田谷から移つて二百年、寂しい道場に過ぎなかつた。其でも一時は、俱舎クシヤの寺として、榮えたこともあつたのだつた。

飛鳥の御世の、貴い御方が、此寺の本尊を、お夢に見られて、おん子を遣され、堂舎をひろげ、住侶の數をお殖しになつた。おひく境内になる土地の地形デギヤウの進んでゐる最中、その若い貴人が、急に亡くなられた。さうなる筈の、風水フウスキの相サウが、「まろこ」の身を招き寄せたのだらう。よし／＼墓はそのまゝ、其村に築くがよい、との仰せがあつた。其み墓のあるのが、あの麻呂子山だと

言ふ。まろ子といふのは、尊い御一族だけに用ゐられる語で、おれの子といふほどの、意味であつた。ところが、其おことばが縁を引いて、此郷の山には、其後亦、貴人をお埋め申すやうな事が、起つたのである。

だが、さう言ふ物語りはあつても、それは唯、此里の語部カタリベの姥ウバの口に、さう傳へられてゐる、と言ふに過ぎぬ古物語りフルであつた。纔ワッかに百年、其短いと言へる時間も、文字に縁遠い生活には、さながら太古を考へると、同じ昔となつてしまつた。

旅の若い女ニヨシヤウ性は、型摺りの大様な美しい模様をおいた著る物を襲うて居る。笠は、浅い縁ヘリに、深い縹色ハナダの布が、うなじを隠すほどに、さがつてゐた。

日は仲春、空は雨あがりの、爽やかな朝である。高原カウゲンの寺は、人の住む所から、自ら遠く建つて居た。唯凡、百の僧俗が、寺中に起き伏して居る。其すら、引き續く供養饗宴の疲れで、今日はまだ、遅い朝を、姿すら見せずにある。

その女人は、日に向つてひたすら輝く伽藍のりを、残りなく歩いた。寺の南境は、み墓山の裾から、東へ出てゐる長い崎の盡きた所に、大門はあつた。其中腹と、東の鼻とに、西塔・東塔が立つて居る。丘陵の道をうねりながら登つた旅びとは、東の塔の下に出た。

雨の後の水氣の、立つて居る大和の野は、すつかり澄みきつて、若晝ワカヒルのきら／＼しい景色になつて居る。右手の目の下に、集中

して見える丘陵は傍岡カタヲカで、ほの／＼と北へ流れて行くのが、

葛城川だ。平原の真中に、旅笠を伏せたやうに見える遠い小山は、

耳ミ、ナシ無シの山であつた。其右に高くつつ立つてゐる深緑は、畝傍山。

更に遠く日を受けてきらつく水面は、埴安ハニヤスの池ではなからうか。

其東に平たくて低い背を見せるのは、聞えた香具山カグヤマなのだらう。

旅ヲミナゴの女子の目は、山々の姿を、一つ／＼に辿つてゐる。天香具アメノ

山をあれだと考へた時、あの下が、若い父チ、ハ、母の育つた、其から、

叔父叔母、又一族の人々の、行き來した、藤原の里なのだ。

もう此上は見えぬ、と知れて居ても、ひとりで、爪先立て、伸び

上る氣持ちになつて來るのが抑へきれなかつた。

香具山の南の裾に輝く瓦舎カハラヤは、大官ダイクワンダイジ大寺に違ひない。其か

ら更に眞南の、山と山との間に、薄く霞んでゐるのが、飛鳥の村なのであらう。父の父も、母の母も、其又父母も、皆あのあたりで生ひ立たれたのであらう。この國の女子フミナゴに生れて、一足も女ヲ部屋を出ぬのを、美德とする時代に居る身は、親の里も、祖先の土も、まだ踏みも知らぬ。あの陽炎カゲロフの立つてゐる平原を、此足で、隅から隅まで歩いて見たい。

かう、その女ニヨシヤウ性は思つてゐる。だが、何よりも大事なことは、

此郎女イラツメ——貴女は、昨日の暮れ方、奈良の家を出て、こゝまで歩いて來てゐるのである。其も、唯のひとりであつた。

家を出る時、ほんの暫し、心を掠めた——父君がお聞きになつたら、と言ふ考へも、もう氣にはかゝらなくなつて居る。乳母があ

わて、探すだらう、と言ふ心が起つて來ても、却つてほのかな、こみあげ笑ひを誘ふ位の事になつてゐる。

山はづゝしりとおちつき、野はおだやかに畝つて居る。かうして居て、何の物思ひがあらう。この貴な娘御アテゴは、やがて後をふり向いて、山のなぞへについて、次第に首をあげて行つた。

二上山。あゝこの山を仰ぐ、言ひ知らぬ胸騒ぎ。——藤原・飛鳥の里々山々を眺めて覺えた、今の先の心とは、すつかり違つた胸トキメの悸き。旅の郎女は、脇目も觸らず、山に見入つてゐる。さうして、靜かな思ひの充ちて來る満悦を、深く覺えた。昔びとは、確實な表現を知らぬ。だが謂はゞ、——平野の里に感じた喜びは、クワコシヤウ過去生に向けてのものであり、今此山を仰ぎ見ての驚きは、未ミ

來世ライセを思ふ心躍りだ、とも謂へよう。

塔はまだ、嚴重にやらひを組んだまゝ、人の立ち入りを禁イマシめてあつた。でも、ものに拘泥することを教へられて居ぬ姫は、何時の間にか、塔の初重シヨの欄干に、自分のよりかゝつて居るのに、氣がついた。さうして、しみ／＼と山に見入つて居る。まるで瞳が、吸ひこまれるやうに。山と自分ツナガとに繋る深い交渉を、又くり返し思ひ初めてゐた。

郎女の家は、奈良東城、右京三條第七坊にある。祖父オホチムチマロ武智麻呂のこゝで亡くなつて後、父が移り住んでからも、大分の年月になる。父は男フトコザカリ壯ツヨクには、横佩ヨコハキの大將ダイシヤウと謂はれる程、一ふりの大刀のさげ方にも、工夫を凝らさずには居られぬだて者モノであつた。

なみの人の豎にさげて佩く大刀を、横へて吊る佩き方を案出した人である。新しい奈良の都の住人は、まださうした官吏としての、華奢な服装を趣向コノむままでに到つて居なかつた頃、姫の若い父は、近代の時世装に思ひを凝して居た。その家に覲タツねて来る古い留學生や、新來イマキの歸化僧などに尋ねることも、張文成などの新作の物語りの類を、問題にするやうなのとも、亦違うてゐた。

さうした闊達な、やまとごゝろの、赴くまゝにふるまうて居る間に、才優ザエれた族ウカラビト人が、彼を乗り越して行くのに氣がつかかなかつた。姫には叔父、彼——豊成には、さしつぎの弟、仲麻呂である。

その父君も、今は筑紫に居る。尠くとも、姫などはさう信じて居

た。家族の半以上は、ダザイノソツ太宰帥のはな／＼しい生活の装ひとして、連れられて行つてゐた。宮廷から賜るトネリ資人・タチ僉仗も、大貴族の家の門地の高さを示すものとして、美々しく着飾らされて、皆任地へついて行つた。さうして、奈良の家には、その年は亦とりわけ、寂しい若葉の夏が來た。

寂かな屋敷には、響く物音もない時が、多かつた。この家も世間どほりに、女部屋は、日あたりに疎い北の屋にあつた。その西側に、小なシトミド蔀戸があつて、其をつきあげると、方三尺位な牕になるやうに出來てゐる。さうして、其内側には、夏冬なしに簾が垂れてあつて、戸のあげてある時は、外からの隙見を禦いだ。

それから外ソトマハりは、家の廣い外郭になつて居て、オホヒヤ大炊屋もあれ

ば、湯殿火燒き屋ヒタなども、下人の住ひに近く、立つてゐる。苑ソノと言はれる菜畠や、ちよつとした果樹園らしいものが、女部屋の窓から見える、唯一の景色であつた。

武智麻呂存ソンジヤウ生の頃から、此屋敷のことを、世間では、南家と呼び慣はして來てゐる。此頃になつて、仲麻呂の威勢が高まつて來たので、何となく其古い通稱は、人の口から薄れて、其に替る稱へが、行はれ出した様だつた。三條七坊をすつかり占めた大屋敷を、一垣内ヒトカキツ——一字ヒトアザナと見做して、横佩牆内ヨコハキカキツと言ふ者が、著しく殖えて來たのである。

その太宰府からの音づれが、久しく絶えたと思つてゐたら、都とは目と鼻の難波ナニハに、いつか還り住んで、遙かに筑紫の政を聽いて

ゐた帥ソツの殿であつた。其父君から遣された家の子が、
ヒトクルマ一車に
 積み餘るほどな家づとを、家に残つた家族たち殊に、姫君にと言
 つてはこんで來た。

山國の狭い平野に、一代々々都遷しのあつた長い歴史の後、こゝ
 五十年、やつと一つ處に落ちついた奈良の都は、其でもまだ、な
 か／＼整ふまでには、行つて居なかつた。

官廳や、大寺が、によつきり／＼、立つてゐる外は、貴族の屋敷
 が、處々むやみに場をとつて、その相間々々に、板屋や瓦屋が、
 交りまじりに續いてゐる。其外は、廣い水田と、畠と、存外多い
 荒蕪地の間に、人の寄りつかぬ塚や岩イハムラ群が、ちらばつて見える
 だけであつた。兎や、狐が、大路小路を驅ける様なのも、毎日

のこと。つい此頃も、朱雀シユジャク大路オホヂの植ゑ木の梢を、夜になると、
鼯鼠ムサ、ビが飛び歩くと言ふので、一騒ぎした位である。

横佩家の郎女イラツメが、稱讚シヨウサン淨土ジャウド佛攝受ブツセフジユギヤウ經を寫しはじめたの

も、其頃からであつた。父の心づくしの贈り物の中で、一番、姫君の心を饒ニギやかにしたのは、此新譯の阿彌陀經イチクワン一卷であつた。

國の版圖の上では、東に偏り過ぎた山國の首都よりも、太宰府は、

遙かに開けてゐた。大陸から渡る新しい文物は、皆一度は、この
遠トホの宮廷ミカド領を通過するのであつた。唐から渡つた書物などで、太宰府ミカドぎりに、都まで出て來ないものが、なか／＼多かつた。

學問や、藝術の味ひを知り初めた志の深い人たちは、だから、大唐までは望まれぬこと、せめて大宰府へだけはと、筑紫下りを念

願するほどであつた。

南家の郎ナシケ女イラツメの手に入つた稱讚淨土經も、大和一國の大オホテラ寺と言

ふ大寺に、まだ一部も藏せられて居ぬものであつた。

姫は、薮シトミド戸近くに、時としては机を立て、寫經をしてゐるこ

ともあつた。夜も、侍女たちを寢靜まらしてから、油アフラビ火の下で、

一心不亂に書き寫して居た。

百部は、夙くに寫し果した。その後は、千部手寫の發願をした。

冬は春になり、夏山と繁つた春日山も、既に黄葉モミヂして、其がもう

散りはじめた。蟋蟀は、晝も苑一面に鳴くやうになつた。佐保川

の水を堰セき入れた庭の池には、遣ヤり水傳ひに、川千鳥の啼く日す

ら、續くやうになつた。

今朝も、深い霜朝を、何處からか、鴛鴦ツマドリの夫婦鳥が來て浮んで居ります、と童女ワラハメが告げた。

五百部を越えた頃から、姫の身は、目立つてやつれて來た。ほんの纒かの眠りをとる間も、ものに驚いて覺めるやうになつた。其でも、八百部の聲を聞く時分になると、衰へたなりに、健康は定まつて來たやうに見えた。やゝ蒼みを帯びた皮膚に、心もち細つて見える髪が、愈々黒く映え出した。

八百八十部、九百部。郎女は侍女にすら、ものを言ふことを厭ふやうになつた。さうして、晝すら何か夢見るやうな目つきして、うつとり薺シトミド戸ゴごしに、西の空を見入つて居るのが、皆の注意をひくほどであつた。

實際、九百部を過ぎてからは筆も一向、はかどらなくなつた。二十部・三十部・五十部。心ある女たちは、文字の見えない自身たちのふがひなさを悲しんだ。郎女の苦しみを、幾分でも分けることが出来ように、と思ふからである。

南家の郎女が、宮から召されることになるだらうと言ふ噂が、京・洛外に廣がつたのも、其頃である。屋敷中の人々は、上近く事^{ツカ}へる人たちから、垣内^{カキツ}の隅に住む奴隸^{ヤッコ}・婢^{メヤッコ}・奴の末にまで、顔を輝^カかして、此とり沙汰を迎へた。でも姫には、誰一人其を聞かせ^カる者がなかつた。其ほど、此頃の郎女は氣むつかしく、外目^{ヨソメ}に見えてゐたのである。

千部手寫の望みは、さうした大願から立てられたものだらう、と

言ふ者すらあつた。そして誰ひとり、其を否む者はなかつた。

南家の姫の美しい膚は、益々透きとほり、潤んだ目は、愈々大きく黒々と見えた。さうして、時々聲に出して誦する經の文が、物の音に譬へやうもなく、さやかに人の耳に響く。聞く人は皆、自身の耳を疑うた。

去年の春分の日の事であつた。入り日の光りをまともに受けて、

姫は正座して、西に向つて居た。日は、此屋敷からは、稍坤によ

つた遠い山の端に沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落

日は俄かに轉き出した。その速さ。雲は炎になつた。日は黄

金の丸になつて、その音も聞えるか、と思ふほど鋭く った。

雲の底から立ち昇る青い光りの風——、姫は、ちつと見つめて居

た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は霽れた。夕闇の上に、目を疑ふほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありくとシヤウゴン莊嚴な人の倂が、瞬間顯れて消えた。後は、眞暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を凝して、何時までも端坐して居た。郎女の心は、其時から愈々澄んだ。併し、極めて寂しくなり勝つて行くばかりである。

ゆくりない日が、半年の後に再來て、姫の心を無ムシヤウ上の歡喜に引き立てた。其は、同じ年の秋、彼岸中チユウニチ日の夕方であつた。姫は、いつかの春の日のやうに、坐してゐた。朝から、姫の白い額の、故もなくひよめいた長い日の、後ノチである。二上山の峰を包む雲の上に、中秋の日の爛熟した光りが、くるめき出したのである。

雲は火となり、日は八ハッシヤク尺の鏡と燃え、青い響きの吹雪を、吹き捲く嵐――。

雲がきれ、光りのしづまつた山の端は、細く金の外輪を靡かして居た。其時、男嶽・女嶽の峰の間に、ありくと浮き出た 髪頭 肩 胸――。

姫は又、あの梯を見ることが、出来たのである。

南家の郎イラツメ女の幸福な噂が、春風に乗つて來たのは、次の春である。

姫は別様の心躍りを、一月も前から感じて居た。さうして、日を數り初めて、ちようど、今日と言ふ日。彼岸中日、春シユンブン分

の空が、朝から晴れて、雲雀は天に翔り過ぎて、歸ることの出來ぬほど、青雲が深々とたなびいて居た。郎女は、九百九十九部を

寫し終へて、千部目にとりついて居た。

日一日、のどかな温い春であつた。經卷の最後の行、最後の字を書きあげて、ほつと息をついた。あたりは俄かに、薄暗くなつて居る。目をあげて見るシトミド部窓の外には、しとくと——音がしたゝつて居るではないか。姫は立つて、手づから簾をあげて見た。雨。苑の青菜が濡れ、土が黒ずみ、やがては瓦屋にも、音が立つて來た。

姫は、立つても坐中ても居られぬ、焦躁に悶えた。併し日は、益々暗くなり、夕暮れに次いで、夜が來た。

茫然として、姫はすわつて居る。人聲も、雨音も、荒れ模様クハ、に加つて來た風の響きも、もう、姫は聞かなかつた。

七

南家の郎女の神カミカク隠しに遭つたのは、其夜であつた。家人は、翌朝空が霽れ、山々がなごりなく見えわたる時まで、氣がつかずに居た。

横ヨコハキカキツ佩牆内に住む限りの者は、男も、女も、上ウハの空になつて、洛中洛外を馳せ求めた。さうした奔ハシり人の多く見出される場處と言ふ場處は、残りなく捜された。春日山の奥へ入つたものは、伊賀境までも踏み込んだ。高圓山の墓原も、佐紀の沼地・雑木原も、又は、南は山ヤマムラ村、北は奈良山、泉川の見える處まで馳せ　つて、

戻る者も戻る者も、皆空足を踏んで来た。

姫は、何處をどう歩いたか、覚えがない。唯家を出て、西へくと辿つて来た。降り募るあらしが、姫の衣を濡した。姫は、誰にも教はらないで、裾を脛まであげた。風は、姫の髪を吹き亂した。姫は、いつとなく、髻をとり束ねて、襟から着物の中に、含み入れた。夜中になつて、風雨が止み、星空が出た。

姫の行くてには常に、二つの峰の竝んだ山の立ち姿がはつきりと聳えて居た。毛孔の豎つやうな畏しい聲を、度々聞いた。ある時は、鳥の音であつた。其後、頻りなく斷續したのは、山の獸の叫び聲であつた。大和の内も、都に遠い廣瀬・葛城あたりには、人居などは、ほんの忘れ残りのやうに、山陰などにあるだけで、

あとは曠野。それに——、本村^{ホンムラ}を遠く離れた、時はづれの、人棲^{タキ}まぬ田居^{タキ}ばかりである。

片破れ月が、上^{アガ}つて來た。其が却て、あるいてゐる道の邊^{ホトリ}の凄さを照し出した。其でも、星明りで辿つて居るよりは、よるべを覺えて、足が先へくと出た。月が中天へ來ぬ前に、もう東の空が、ひいわり白^{シラ}んで來た。

夜のほの／＼明けに、姫は、目を疑ふばかりの現實に行きあつた。——横佩家の侍女たちは何時も、夜の起きぬけに、一番最初に目撃した物事で、日のよしあしを、占つて居るやうだつた。さう言ふ女どものふるまひに、特別に氣は牽かれなかつた郎女だけれど、よく其人々が、「今朝^{ケサ}の朝目^{アサメ}がよかつたから」「何と言ふ

情ない朝目でせう」などと、そはくと興奮したり、むやみに塞ぎこんだりして居るのを、見聞きしてゐた。

郎女は、生れてはじめて、「朝目よく」と謂つた語を、内容深く感じたのである。目の前に赤々と、丹塗りに照り輝いて、朝日を反射して居るのは、寺の大門ではないか。さうして、門から、更に中門が見とほされて、此もおなじ丹塗りに、きらめいて居る。山裾の勾配に建てられた堂・塔・伽藍は、更に奥深く、朱に、青に、金色に、光りの棚雲を、幾重にもつみ重ねて見えた。朝目のすがしきは、其ばかりではなかつた。其寂寞たる光りの海から、高く抽で、見える二上の山。

淡^{タン}海^{カイ}公の孫、大^{タイ}織^シ冠^{クワン}には曾孫。藤^{トウ}氏^シ族^{ゾク}長^{チャウ}太宰帥、南^ナ
 家^{ンケ}の豊成、其^{ダイ}第^{イチ}一^チ嬢^{チャウ}子^{ウシ}なる姫である。屋敷から、一步はおろ
 か、女部屋を膝^{ヒザ}行^リり出ることすら、たまさかにもせぬ、郎^{イラツメ}女^メの
 ことである。順^{ジュン}道^{ドウ}ならば、今頃は既に、藤原の氏神河内の枚^ヒ
 岡^{ラフカ}の御^{オン}神^{カミ}か、春日の御^{ミヤ}社^{シロ}に、巫女^{ミコ}の君^{キミ}として仕へてゐるは
 ずである。家に居ては、男を寄せず、耳に男の聲も聞かず、男の
 目を避けて、仄暗い女部屋に起き臥しゝてゐる人である。世間の
 事は、何一つ聞き知りも、見知りもせぬやうに、おふしたてられ
 て來た。

寺の淨域が、奈良の内外^{ウチト}にも、幾つとあつて、横佩^{カキツ}牆^{タケ}内と讚^{タケ}へら
 れてゐる屋敷よりも、もつと廣大なものだ、と聞いて居た。さう

でなくとも、經文の上に傳へた淨土の莊嚴シヤウゴンをうつすその建て物の様は想像せぬではなかつた。だが目のあたり見る尊さは唯息を呑むばかりであつた。之に似た驚きの經驗は曾て一度したことがあつた。姫は今其を思ひ起して居る。簡素と豪華との違ひこそあれ、驚きの歡喜は、印象深く残つてゐる。

今の太上天皇様が、まだ宮廷の御あるじで居させられた頃、八歳ハッサの南家の郎女イラツメは、童女ワラハメとして、初の殿上ハツテンジャウをした。穆々ボクたる宮の内の明りは、ほのかな香氣を含んで、流れて居た。晝マすら眞夜マヨに等しい、御帳臺ミチヤウダイのあたりにも、尊いみ聲は、昭々セウと珠を揺る如く響いた。物わきまもない筈の、八歳の童女が感泣した。

「南家には、惜しい子が、女になつて生れたことよ」と仰せられた、と言ふ畏れ多い風聞が、暫らく貴族たちの間に、くり返された。其後十二年、南家の娘は、二十ハタチになつてゐた。幼いからの聰サトさにかはりはなくて、玉・水スエシヤウ精セイの美しさが益々加つて來たとの噂が、年一年と高まつて來る。

姫は、大門シキミの闕カドを越えながら、童女ワラハメテンジヤウ殿テン上の昔カシコの畏オソさを、追想して居たのである。長いイシキミチ磬ケイ道ミチを踏んで、中門に届く間にも、誰一人出あふ者がなかつた。恐れを知らず育てられた大貴族の郎女は、度ツ、マしく併ヒしのどかに、御堂々々フガを拜イんで、岡の東塔に來たのである。

こゝからは、北大和の平野は見えぬ。見えたところで、郎女は、

奈良の家を考へ浮べることも、しなかつたであらう。まして、家人たちが、神隠しに遭うた姫を、探しあぐんで居ようなどゝは、思ひもよらなかつたのである。唯うつとりと、塔の下から近々と仰ぐ、二上山の山肌に、現し世の目からは見えぬ姿を惟ひ觀ようとして居るのであらう。

此時分になつて、寺では、人の動きが繁くなり出した。晨朝の勤めの間も、うとくして居た僧たちは、爽やかな朝の眼を睜いて、食堂へ降りて行つた。奴婢は、其々もち場持ち場の掃除を勵む爲に、ようべの雨に洗つたやうになつた、境内の沙地に出て來た。

そこにござるのは、どなたぞな。

岡の陰から、恐る／＼頭をさし出して問うた一人の寺奴ヤツコは、あるべからざる事を見た様に、自分自身を咎めるやうな聲をかけた。女人の身として、這入ることの出来ぬ結界を犯してゐたのだつた。姫は答へよう、とはせなかつた。又答へようとしても、かう言ふ時に使ふ語には、馴れて居ぬ人であつた。

若し又、適當な語を知つて居たにしたらところで、今はそんな事に、考へを紊されては、ならぬ時だつたのである。

姫は唯、山を見てゐた。依然として山の底に、ある倂ヤツコを観じ入つてゐるのである。寺奴ヤツコは、二言コトとは問ひかけなかつた。一晚のさすらひでやつれては居ても、服装から見えずぐ、どうした身分の人か位の判断は、つかぬ筈はなかつた。又暫らくして、四五人の

登音が、びた／＼と岡へ上つて來た。年のいつたのや、若い僧たちが、ばら／＼と走つて、塔のやらひの外まで來た。

こゝまで出て御座れ。そこは、男でも這入るところではない。

ニヨニン
女人は、とつとつ出てお行きなされ。

姫は、やつと氣がついた。さうして、人とあらそはぬ癖をつけられた貴族の家の子は、重い足を引きながら、竹垣の傍まで來た。

見れば、奈良のお方さうなが、どうして、そんな處にいらつしやる。

それに又、どうして、こゝまでお出でだつた。伴の人も連れずに――。

口々に問うた。男たちは、咎める口とは別に、心はめい／＼、貴

い女性をいたはる氣持ちになつて居た。

山ををがみに……。

まことに唯一ヒトコト詞タウ。當の姫すら思ひ設けなんだ詞コトバが、匂ふが如く出た。貴族の家庭の語と、凡下ボンゲの家々の語とは、すつかり變つて居た。だから言ひ方も、感じ方も、其うへ、語其ものささへ、郎女の語が、そつくり寺の所化輩ハイには、通じよう筈がなかつた。

でも、其でよかつたのである。其でなくて、語の内容が、其まゝ受けとられようものなら、南家の姫は、即座に氣のふれた女、と思はれてしまつたであらう。

それで、御館ミタチはどこぞな。

みたち……。

おうちは……。

おうち……。

おやかたは、と問ふのだよ——。

を。家はとや。右京藤原南家……。

俄然として、群集の上にぎはめきが起つた。四五人だつたのが、あとから後から登つて來た僧たちも加つて、二十人以上にもなつて居た。其が、口々に喋り出したものである。

ようべの嵐に、まだ残りがあつたと見えて、日の明るく照つて居る此小晝ビルに、又風が、ぎはつき出した。この岡の崎にも、見おろす谷にも、其から二上山へかけての尾根ヲネ々々にも、ちらほら白く見えて、花の木がゆすれて居る。山の此方コナタにも小櫻の花が、咲き

出したのである。

此時分になつて、奈良の家では、誰となく、こんな事を考へはじめてゐた。此はきつと、里方の女たちのよくする、春の野遊びに出られたのだ。——何時からとも知らぬ、習しナラハである。春秋の、日と夜と平分ハイブンする其頂上に當る日は、一日、日の影を逐うて歩く風が行はれて居た。どこまでもどこまでも、野の果て、山の末、海の渚まで、日を送つて行く女衆が多かつた。さうして、夜に入つてくたくになつて、家路を戻る。此爲來りを何時となく、女たちの咄すのを聞いて、姫が、女の行ギヤウとして、この野遊びをする氣になられたのだ、と思つたのである。かう言ふ、考へに落ちつくくと、ありやうもない考へだと訣つて居ても、皆の心が一時、ほ

うと軽くなつた。

ところが、其日も晝さがりになり、段々夕光ユフカゲの、催して来る時刻が來た。昨日は、駄目になつた日の入りの景色が、今日は中チユウ日ニチにも劣るまいと思はれる華やかさで輝いた。横佩家の人々の心は、再重くなつて居た。

八

奈良の都には、まだ時をり、石城シキと謂はれた石垣を残して居る家の、見かけられた頃である。度々の太政官ダイジャウグワン符で、其を家の周マハりに造ることが、禁ぜられて來た。今では、宮廷より外には、石シ

城^キを完全にとり　した豪族の家などは、よくくの地方でない限りは、見つからなくなつて居る筈なのである。

其に一つは、宮廷の御在所が、御一代々々に替つて居た千數百年の歴史の後に、飛鳥^{アスカ}の都は、宮殿の位置こそ、數町の間をあちこちせられたが、おなじ山河一帯の内にあつた。其で凡、都遷しのなかつた形になつたので、後^{アト}からく地割りが出來て、相應な都^{トシヤウ}城の姿は備へて行つた。其數朝の間に、舊族の屋敷は、段々、家構へが整うて來た。

葛城に、元のまゝの家を持つて居て、都と共に一代ぎりの、屋敷を構へて居た蘇我^{ソガノオミ}臣なども、飛鳥の都では、次第に家作りを擴げて行つて、石城^{シキ}なども高く、幾重にもとり　して、凡永久の館

作りをした。其とおなじ様な氣持ちから、どの氏でも、大なり小なり、さうした石城シキづくりの屋敷を構へるやうになつて行つた。蘇我臣ヒトナガ一流れで最榮えた島の大臣家オトツケの亡びた時分から、石城の構へは禁トめられ出した。

この國のはじまり、天から授けられたと言ふ、宮廷に傳はる神の御詞ミコトバに背く者は、今もなかつた。が、書いた物の力は、其が、どのやうに由緒のあるものでも、其ほどの威力を感じるに到らぬ時代が、まだ續いて居た。

其飛鳥の都も、高天原タカマノハラ廣野ヒロヌヒメ姫尊ノミコトサマ様の思召しで、其から一里北の藤井个原に遷され、藤原の都と名を替へて、新しい唐モロコシ様の端正キライしさを盡した宮殿が、建ち並ぶ様になつた。近い飛

鳥から、新渡來の高麗馬に跨つて、馬上で通ふ風流士もあるには

あつたが、多くはやはり、鷺栖の阪の北、香具山の麓から西へ、

新しく地割りせられた京城の坊々に屋敷を構へ、家造りを

した。その次の御代になつても、藤原の都は、日に益し、宮殿が

建て増されて行つて、こゝを永宮と遊ばす思召しが、伺はれた。

その安堵の心から、家々の外には、石城を すものが、又ぼつ／

＼出て來た。さうして、そのはやり風俗が、見る／＼うちに、

また氏々の族長の家圍ひを、あらかた石にしてしまつた。その頃

になつて、天眞宗豊祖父尊様がおおくれになり、御母日

本根子天津御代豊國成姫の大尊様がお立ち遊ばした。その

四年目思ひもかけず、奈良の都に宮遷しがあつた。ところがまる

で、追つかけるやうに、藤原の宮は固より、目ぬきの家竝みが、
 不意の出火で、其こそ、あつと言ふ間に、痕形もなく、空ソラの有モノと
 なつてしまつた。もう此頃になると、太政官符ダイジヤウグワシフに、更にキビ厳し
 い添書コトワキがついて出ずとも、氏々の人は皆、目の前のすばやい人
 事自然の交錯した轉變テンペンに、目を瞠るばかりであつたので、久し
 い石城シキの問題も、其で、解決がついて行つた。
 古い氏種ウヂスジヤウ姓を言ひ立て、神代以來の家職の神聖を誇つた者ど
 もは、其家職自身が、新しい藤原奈良の都には、次第に意味を失
 つて來てゐる事に、氣がついて居なかつた。
 最早くそこに心づいた、姫の祖父淡海タンカイ公などは、古き神祕を誇
 つて來た家職を、末代まで傳へる爲に、別に家を立て、中臣の名

を保たうとした。さうして、自分・子供ら・孫たちと言ふ風に、
 いちはやく、新しい官ツカサビト人の生活に入り立つて行つた。

ことし、四十を二つ三つ越えたばかりの大オホトモノヤカモチ伴家持は、父旅人タビト

の其年頃よりは、もつと優れた男ぶりであつた。併し、世の中は
 もう、すつかり變つて居た。見るもの障サハるもの、彼の心を苛イラつか

せる種にならぬものはなかつた。淡海公の、小百年前に實行して
 居る事に、今はじめて自分の心づいた鈍オソましさが、憤らずに居ら
 れなかつた。さうして、自分とおなじ風の性向の人の成り行きを、

まぎ／＼省みて、慄然とした。現に、時に誇る藤原びとでも、

まだ昔風の夢に泥ナツんで居た南家の横佩右大臣は、さきをとゞし、

太宰キングワイノソツ員外オト帥オトに貶されて、都を離れた。さうして今は、難波

で謹慎してゐるではないか。自分の親旅人も、三十年前に踏んだ道である。

世間の氏上家の主人は、大方もう、石城など築きマハして、大門小門を繋ぐと謂つた要害と、裝飾とに、興味を失ひかけて居るのに、何とした自分だ。おれはまだ現に、出来るなら、宮廷のお目こぼしを頂いて、石に圍はれた家の中で、家の子どもを集め、氏^ウヂビト人たちを召びつどへて、弓場^{ユバ}に精勵させ、棒術^{ホコユケ}・大刀かきにシユツセイ出精させよう、と謂つたことを空想して居る。さうして年^{トシバ}々、頻繁に、氏神其外の神々を祭つてゐる。其度毎に、家の語部^{カタリベ}大伴^{カタリノミヤツコ}語造^{オムナ}の姫たちを呼んで、之に捉へ處もない昔代^{ムカシヨ}の物語りをさせて、氏人^{ウヂビト}に傾聽を強ひて居る。何だか、空な事^{クウ}

に力を入れて居たやうに思へてならぬ寂しさだ。

だが、其氏神祭りや、祭りの後宴ゴエンに、大勢オホゼイの氏人ウヂビトの集ること

は、とりわけやかましく言はれて來た、三四年以來の法度ハットである。

こんな溜め息を洩しながら、大伴氏の舊い習しを守つて、どこまでも、宮廷守護の爲の武道の傳襲に、努める外はない家持だつたのである。

越中守として踏み歩いた越路コシチの泥のかたが、まだ行ムカバキ 膝ムカバキから落ち
きらぬ内に、もう復マタ、都を離れなければならぬ時の、迫つて居る
やうな氣がして居た。其中、此針の筵イフの上で、兵部少輔ヒヤウブセフから、大
輔イフに昇進した。そのことすら、益々脅迫感を強める方にばかりは
たらいた。

今年五月にもなれば、東大寺の四天王像の開眼カイゲンが行はれる筈で、奈良の都の貴族たちには、すでに寺から内見を願つて來て居た。

さうして、忙しい世の中にも、暫らくはその評判が、すべてのいざこざをおし鎮める程に、人の心を浮き立たした。本朝ホンテウ出來の像としてはまづ、此程物凄い天部テンブの姿を拜んだことは、はじめてだ、と言ふものもあつた。神代の荒神アラたちも、こんな形相ギヤウサウでおありだつたらう、と言ふ噂も聞かれた。

まだ公オホヤケの供養もすまぬのに、人の口はうるさいほど、頻繁に流説をふり撒いてゐた。あの多聞天と、廣目天との顔つきに、思ひ當るものがないか、と言ふのであつた。此はこゝだけの咄だよ、と言つて話したのが、次第に廣まつて、家持の耳までも聞えて來た。

なるほど、憤怒フンヌの相サウもすさまじいにはすさまじいが、あれがどうも、當今大倭一だと言はれる男たちの顔、そのまゝだと言ふのである。貴人は言はぬ、かう言ふ種類の噂は、えて供をして見て來た道ミチ、々の博士ハカセたちと謂つた、心蔑サモしいものゝ、言ひさうな事である。

多聞天は、大師タイシ藤原惠美中卿エミチユウケイだ。あの柔和な、五十を越してもまだ、三十代の美しさを失はぬあの方が、近頃おこりつぽくなつて、よく下官ツカや、仕人ビトを叱るやうになつた。あの圓滿ウマし人ビトが、どうしてこんな顔つきになるだらう、と思はれる表情をすることがある。其面オモもちそつくりだ、と尤らしい言ひ分なのである。さう言へば、あの方が壯盛ワカザカりに、棒術ホコユケを嗜コノんで、今にも事あ

れかしと謂つた顔で、立派な甲ヨロヒをつけて、のつし／＼と長い物を杖ツいて歩かれたお姿が、あれを見てゐて、ちらつくやうだなどと相槌をうつ者も出て來た。

其では、廣目天の方はと言ふと、

さあ、其がの——。

と誰に言はせても、ちよつと言ひ澁るやうに、困つた顔をして見せる。

實は、ほんの人の噂だかの。噂だから、保證は出來ぬがの。義淵僧正の弟子の道鏡法師に、似てるぞなど言ふがや。……けど、他人ヒトに言はせると、——あれはもう、二十幾年にもなるかいや

——筑紫で伐たれなされたゼンダザイノセウニ前太宰少貳——藤原廣嗣トノ——の殿シに生
ヤウウツ寫 しぢや、とも言ふがいよ。

わしにも、どちらとも言へんがの。どうでも、見たことのある
 お人に似て居さつしやるには、似てゐさつしやるげなが……。

何しろ、此二つの天部テンベが、互に敵視するやうな目つきで、睨みあ
 つて居る。噂を氣にした住侶たちが、色々に置き替へて見たが、
 どの隅からでも、互に相手の姿を、マナジリ眦を裂いて見つめて居る。と
 うくあきらめて、自然にとり沙汰の消えるのを待つより爲方が
 ない、と思ふやうになつたと言ふ。

若しや、天下に大亂でも起きなければえゝが——。

こんな唄きは、何時までも續きさうに、時と共に倦まずに語られ

た。

前少貳殿ゼンでなくて、弓削新發意ユゲシンボチの方であつてくれゝば、いつそ安心だがなあ。あれなら、事を起しさうな房主でもなし。起したくても、起せる身分でもないぢやまで——。

言ひたい傍ハウダイ題タイな事を言つて居る人々も、たつた此一つの話題を持ちあぐね初めた頃、噂の中の大師惠美朝臣エミンの姪の横佩家の郎イラツ女メが、神隠しに遭うたと言ふ、人の口の端に、旋風ツジカゼを起すやうな事件が、湧き上つたのである。

九

兵部大輔ヒヤウブタイフ大伴家持は、偶然この噂を、極めて早く耳にした。ち

ようど、春シユンブン分ブンから二日目の朝、朱雀大路を南へ、馬をやつて

居た。二人ばかりの資人トネリが徒歩カチで、驚くほどに足早について行く。

此は、晋唐の新しい文學の影響を、受け過ぎるほど享け入れた文人かたぎの彼には、數年來珍しくもなくなつた癖である。かうして、何處まで行くのだらう。唯、朱雀の竝み木の柳の花がほゞけて、霞のやうに飛んで居る。向うには、低い山と、細長い野が、のどかに陽炎カゲロふばかりである。

資人の一人が、とつと追ひついて來たと思ふと、主人の鞍に顔をおしつける様にして、新しい耳を聞かした。今行きすがうた知り人の口から、聞いたばかりの噂である。

それで、何か——。娘御の行くへは知れた、と言ふのか。

はい……。いゝえ。何分、その男がとり急いで居りまして。

この間抜け。話はもつと上手に聴くものだ。

柔らかく叱つた。そこへ今一人の伴が、追ひついて來た。息をき
らしてゐる。

ふん。汝は聞き出したね。南家の嬢子は、どうなつた——。

出端に油かけられた資人は、表情に隠さず心の中を表した此頃の
人の、自由な咄し方で、まともに鼻を蠢して語つた。

當麻の邑まで、をとゝひ夜の中に行つて居たこと、寺からは、昨
日午後横佩牆内へ知らせが届いたこと其外には、何も聞きこむ間
のなかつたことまで。家持の聯想は、環のやうに繋つて、暫らく

は馬の上から見る、街路も、人通りも、唯、物として通り過ぎるだけであつた。

南家で持つて居た藤原の氏ウヂノカミ上職が、兄の家から、弟仲麻呂―

押勝―の方へ移らうとしてゐる。來年か、再サライネン來年のヒラヲカ枚岡祭り

に、參向する氏人の長者は、自然かの大師のほか、人がなくなつ

て居る。惠エミ美家ケからは、嫡子クス久須麻呂マロの爲、自分の家の第一嬢子

をくれとせがまれて居る。先日も、久須麻呂の名の歌が届き、自

分の方でも、娘に代つて返し歌を作つて遣した。今朝ケサも今朝、又

折り返して、男からの懸ケ想文サウブミが、來てゐた。

そのムコガネ婿候補の父なる人は、五十になつても、若かつた頃の容色に

頼む心が失せずにゐて、兄の家娘にも執心は持つて居るが、如何

に何でも、あの郎女だけには、とり次げないで居る。此は、横佩家へも出入りし、大伴家へも初中終來る古刀自の、人のわるい内證話であつた。其を聞いて後、家持自身も、何だか好奇心に似たものが、どうかすると頭を擡^{モタ}げて來て困つた。仲麻呂は今年、五十を出てゐる。其から見れば、ひとまはりも若いおれなどは、思ひ出にまう一度、此句^{ニホ}やかな貌^{カホバナ}花を、垣内^{カキツ}の坪苑^{ツボ}に移せぬ限りはない。こんな當時の男が、皆持つた心をどりに、はなやいだ、明るい氣がした。

だが併し、あの郎女は、藤原四家の系統^{スヂ}で一番、神さび^{カム}たたちを持つて生れた、と謂はれる娘御である。今、枚岡^{ヒラヲカ}の御神^{オンカミ}に仕へて居る齋^{イツ}姫^{ヒメ}の罷める時が來ると、あの嬢子^{ヲトメ}が替つて立つ筈だ。

其で、貴い所からのお召しにも應じかねて居るのだ。……結局、誰も彼も、あきらめねばならぬ時が来るのだ。神の物は、神の物——。横佩家の娘御は、神の手に落ちつくのだらう。

ほのかな感傷が、家持の心を淨めて過ぎた。おれは、どうもあきらめが、よ過ぎる。十トラを出たばかりの幼さで、母は死に、父は疾んで居る太宰府へ降つて、夙ハヤくから、海の彼方アナタの作り物語りや、モロコシウタ唐詩のをかしさを知り初めたのが、病みつきになつたのだ。

死んだ父も、さうした物は、或は、おれよりも嗜きだつたかも知れぬほどだが、もつと物に執シフヂヤク著が深かつた。現に、大伴の家の行く末の事なども、父はあれまで、心を悩まして居た。おれも考へれば、たまらなくなつて来る。其で、氏人を集めて諭したり、

歌を作つて訓諭して見たりする。だがさうした後の氣持ちの爽やかさは、どうしたことだ。洗ひ去つた様に、心がすつとしてしまふのだつた。まるで、初めから家の事など考へて居なかつた、とおなじすが／＼しい心になつてしまふ。

あきらめと言ふ事を、知らなかつた人ばかりではないか。……昔物語りに語られる神でも、人でも、傑れた、と傳へられる限りの方々は——。それに、おれはどうしてかうだらう。

家持の心は併し、こんなに悔恨に似た心持ちに沈んで居るに繋らず、段々氣にかゝるものが、薄らぎ出して來てゐる。

ほう　これは、キヤウハテ京　極　まで來た。

朱雀大路も、オホヂこゝまで來ると、縦横に通る地割りの太い路筋ばか

りが、白々として居て、どの區畫にもく、家は建つて居ない。去年の草の立ち枯れたのと、今年生えて稍莖を立て初めたのがまじりあつて、屋敷地から喰み出し、道の上までも延びて居る。

こんな家が――。

驚いたことは、そんな草原の中に、唯一つ大きな構への家が、建ちかゝつて居る。遅い朝を、もう餘程、今日の爲事に這入つたらしい木の道の者たちが、骨組みばかりの家の中で、立ちはたらいて居るのが見える。家の建たぬ前に、既に屋敷廻りの地デギヤウ形が出来て、見た目にもさつぱりと、垣をとりして居る。

土を積んで、石に代へた垣、此頃言ひ出した築土垣ツキヒデガキといふのは、此だな、と思つて、ちつと目をつけて居た。見るく、さうした

新しい好尚コノミのおもしろさが、家持の心を奪うてしまつた。

築土垣ツキヒヂガキの處々に、きりあけた口があつて、其に、門が出来て居

た。さうして、其處から、頻りに人が繋つては出て来て、石を曳く。木を搬モつ。土を搬び入れる。重苦しい石城シキ。懐しい昔構へ。

今も、家持のなくなしたくなく考へてゐる屋敷　りの石垣が、思つてもたまらぬ重壓となつて、彼の胸に、もたれかゝつて來るのを感じた。

おれには、だが、この築土垣を擇トることが出来ぬ。

家持の乗馬メは再、憂鬱に閉された主人を背に、引き返して、五條まで上つて來た。此邊から、右京の方へ折れこんで、坊角マチカドを

りくねりして行く様子は、此主人に馴れた資人トネリたちにも、胸の測

られぬ氣を起させた。二人は、時々顔を見合せ、目くばせをしな
 がら尚、了解が出来ぬ、と言ふやうな表情を交しかはし、馬の後
 を走つて行く。

こんなにも、變つて居たのかねえ。

ある坊角マチカドに來た時、馬をぴたと止めて、獨り言のやうに言つた。

……舊草フルに 新草ニヒまじり、生ひば 生ふるかに——だな。

近頃見つけた歌舞所カブシヨの古記録「東アツマウタ歌」の中に見た一首がふと、

此時、彼の言ひたい氣持ちを、代作して居てくれてゐたやうに、
 思ひ出された。

さうだ。「おもしろき野ヌをば 勿ナ燒きそ」だ。此でよいのだ。

けぐんな顔を仰アフムけてゐる伴トモビト人らに、柔和な笑顔を向けた。

さうは思はぬか。立ち朽りになつた家の間に、どし／＼新しい屋敷が出来て行く。都は何時まで、家は建て詰まぬが、其でもどちらかと謂へば、減るよりも殖えて行つてゐる。此邊は以前、今頃になると、蛙めの、あやまりたい程鳴く田の原が、續いてたもんだ。

仰るとほりで御座ります。春は蛙、夏はくちなは、秋は蝗まる。此邊はとても、歩けたところでは、御座りませんでした。

今一人が言ふ。

建つ家もたつ家も、この立派さは、まあどうで御座りませう。其に、どれも此も、此頃急にはやり出した築^{ツキヒデガキ}土垣^{キツ}を築きまはしまして。何やら、以前とはすつかり變つた處に、參つた氣が

致します。

馬上の主人も、今まで其ばかり考へて居た所であつた。だが彼の心は、瞬間明るくなつて、先年三形王の御殿での宴ウタダケチズサに誦んだ即興が、その時よりも、今はつきりと内容を持つて、心に浮んで來た。うつり行く時見る毎に、心疼イタく 昔の人し 思ほゆるかも 目をあげると、東の方春日の杜モリは、谷陰になつて、こゝからは見えぬが、御蓋山カサ・高圓山タカマド一帯、頂が晴れて、すばらしい春日和になつて居た。

あきらめがさせるのどけさなのだ、とすぐ氣がついた。でも、彼の心のふさぎのむしは迹アトを潜めて、唯、まるで今歩いてゐるのが、オホヤマトヘイセイケイ大日本平城京の土ではなく、ダイタウ大唐長安の大道の様な錯覺の

起つて來るのが押へきれなかつた。此馬がもつと、毛並みのよい純白の馬で、跨つて居る自身も亦、若々しい二十代の貴公子の氣がして來る。神々から引きついであつた、重苦しい家の歴史だの、夥しい數の氏人などから、すつかり截り離されて、自由な空にかけて居る自分でゞもあるやうな、豊かな心持ちが、暫らくは拂つてもく、消えて行かなかつた。

おれは若くもなし。第一、海東の大日^{オホヤマトヒト}日本人である。おれには、憂鬱な家職が、ひしくと、肩のつまるほどかゝつて居るのだ。こんなことを考へて見ると、寂しくはかない氣もするが、すぐに其は、自身と關係のないことのやうに、心は饒^{ニギ}はしく和らいで來て、爲方がなかつた。

をい、汝^{ワケ}たち。大伴^{ウヂノカミケ}氏上家も、築土垣を引き　さうかな。
とんでもないことを仰せられます。

二人の聲が、おなじ感情から迸り出た。

年の増した方の資人^{トネリ}が、切實な胸を告白するやうに言つた。

私どもは、御譜第では御座りません。でも、大伴と言ふお名は、
御門御垣^{ミカドミカキ}と、關係深い稱へだ、と承つて居ります。大伴家から

して、門垣を今様にする事になつて御覽^{ゴラウ}じませ。御一族の末々

まで、あなた様をお呪^{ノロ}ひ申し上げることでおざりませう。其ど

ころでは、御座りません。第一、ほかの氏々——大伴家よりも、

ぐんと歴史の新しい、人の世になつて初まつた家々の氏人まで

が、御一族^{ナイガシロ}を蔑に致すことになりませう。

こんな事を言はして置くと、折角澄みかゝつた心も、又曇つて來さうな氣がする。家持は忙てゝ、資人の口を緘トめた。

うるさいぞ。誰に言ふ語だと思つて、言つて居るのだ。やめぬか。ジャウダン 雑談だ。雑談を眞に受ける奴が、あるものか。

馬はやつぱり、しつとくくと、歩いて居た。築土垣 築土垣。又、築土垣。こんなに何時の間に、家構へが替つて居たのだらう。家持は、なんだか、晩オソかれ早かれ、ありさうな氣のする次の都——どうやらかう、もつとおつぴらいた平野の中のシンケイジヤウ新京シヤウ城にでも、來てゐるのでないかと言ふ氣が、ふとしかゝつたのを、危く喰ひとめた。

築土垣 築土垣。もう、彼の心は動かなくなつた。唯、よいとす

る氣持ちと、よくないと思はうとする意思との間に、氣分だけが、あちらへ寄りこちらへよりしてゐるだけであつた。

何時の間にか、平群^{ヘグリ}の丘や、色々な塔を持つた京^{キヤウニシ}西^シの寺々の見渡される、三條邊の町尻に來て居ることに氣がついた。

これはく。まだこゝに、残つてゐたぞ。

珍しい發見をしたやうに、彼は馬から身を翻^{カヘ}しておりた。二人の資人はすぐ、馳け寄つて手綱を控へた。

家持は、門と門との間に、細かい柵をし圍らし、目隱^{カラタチ}しに枳^チ殼^{バナ}の叢生^{ヤブ}を作つた家の外構への一個處に、まだ石城^{シキ}が可なり廣く、人丈にあまる程に築いてあるそばに、近寄つて行つた。

荒れては居るが、こゝは横佩^{ヨコハキカキツ}牆内だ。

さう言つて、暫らく息を詰めるやうにして、石垣の荒い面を見入つて居た。

さうに御座ります。此石城シキからしてついた名の、横佩牆内だと申しますとかで、せめて一ところだけは、と強ひてとり毀たな
いとか申します。何分、帥ソウの殿のお都入りまでは、何としても、
此儘で置くので御座りませう。さやうに、人が申し聞けました。
はい。

何時の間にか、三條七坊まで来てしまつてゐたのである。

おれは、こんな處へ來ようと言ふ考へはなかつたのに――。だが、
やつぱり、おれにはまだ／＼、若い色好みの心が、失せないで
居るぞ。何だか、自分で自分をなだめる様な、反省らしいものが

出て來た。

其にしても、靜か過ぎるではないか。

さやうで。で御座りますが、郎女のお行くへも知れ、乳母もそちらへ行つたとか、今も人が申しましたから、落ちついたので御座りませう。

詮索ずきさうな顔をした若い方が、口を出す。

いえ。第一、こんな場合は、騒ぐといけません。騒ぎにつけこんで、悪い魂タマや、靈モが、うよくとつめかけて來るもので御座ります。この御館ミタチも、古いおところだけに、心得のある長老オトナの一人や、二人は、難波へも下らずに、留守に居るので御座りませう。

もうよい／＼。では戻らう。

十

をとめの閨戸ネヤドをおとなふ風フウは、何も、珍しげのない國中シキタの爲來りであつた。だが其にも、曾てはさうした風の、一切行はれて居なかつたことを、主張する村々があつた。何時のほどにか、さうした村が、他村の、別々に守つて來た風習と、その古い爲來りとをふり替へることになつたのだ、と言ふ。かき上る段になれば、何の雜作ザフサもない石城シキだけれど、あれを大昔からとり　して居た村と、さうでない村とがあつた。こんな風に、しかつめらしい説明をす

る宿老^{トネ}たちが、どうかすると居た。多分やはり、語部^{カタリベ}などの昔語りから、来た話なのであらう。踏み越えても這入れ相^{サウ}に見える石垣だが、大昔^{カハ}交された誓ひで、目に見えぬ鬼神^{モノ}から、人間に到るまで、あれが形だけでもある限り、入りこまぬ事になつてゐる。こんな約束が、人と鬼^{モノ}との間にあつて後、村々の人は、石城^{シキ}の中に、ゆつたりと棲むことが出来る様になつた。さうでない村々では、何者でも、垣を躍り越えて這入つて来る。其は、別の何かの爲^{シカタ}方で、防ぐ外はなかつた。祭りの夜でなくても、村なかの男は何の憚りなく、垣を踏み越えて處女の薨戸^{シトミ}をほとくと叩く。石城^{シキ}を圍^{カク}うた村には、そんなことは、一切なかつた。だから、美^{クハ}し女^メの家に、奴隸^{ヤツコ}になつて住みこんだ古^{イニシ}の貴^{ヘアテ}びともあつた。娘の父

にこき使はれて、三年五年、いつか處女に會はれよう、と忍び過した、身にしむ戀物語りもあるくらゐだ。石城シキを掘り崩すのは、何處からでも鬼神モノに入りこんで來い、と呼びかけるのと同じことだ。京の年よりもあつたし、田舎の村々では、之を言ひ立てに、ちつとでも、石城を残して置かうと争うた人々が、多かつたのである。

さう言ふ家々では、實例として恐しい證據を擧げた。卅年も昔、——天平八年嚴命が降つて、何事も命令のはか／＼しく行はれぬのは、朝臣テウシンが先つて行はぬからである。汝ミマシタチ等進んで、石城を毀つて、新京の時世装に叶うた家作りに改めよと、仰せ下された。藤氏四流の如き、今に舊態を易カへざるは、最其位に在るを顧

みざるものぞ、とお咎めが降つた。此時一度、凡、石城はとり毀たれたのである。ところが、其と時を同じくして、モガサ 瘡瘡がはやり出した。越えて翌年、益々盛んになつて、四月北家を手初めに、京家・南家と、主人から、まづ此時疫に亡くなつて、八月にはとうく、式家の宇合卿まで仆れた。家に、防ぐ筈の石城が失せたからだど、天下中の人騒いだ。其でまた、とり壊した家も、ぼつ／＼モ 舊トに戻したりしたことであつた。

こんなすさまじい事も、あつて過ぎた夢だ。けれどもまだ、まぎ／＼と人の心に焼きついて離れぬ、ウツ、 現の恐しさであつた。

其は其として、昔から家の娘を守つた邑々も、段々えたいの知れぬ村の風に感染カマけて、忍び夫ツマの手に任せ傍ハウダイ題にしようとしてゐ

る。さうした求婚ツマドヒの風を傳へなかつた氏々の間では、此は、忍び難い流行であつた。其でも男たちは、のどかな風俗を喜んで、何とも思はぬやうになつた。が、家庭の中では、母・妻・乳母オモたちが、いまだにいきり立つて、さうした風儀になつて行く世間を、呪ひやめなかつた。

手近いところで言うても、大伴宿禰にせよ。藤原朝臣にせよ。さう謂ふ妻どひの式はなくて、數十代宮廷をめぐつて、仕へて來た邑々のあるじの家筋であつた。

でも何時か、さうした氏々の間にも、妻迎への式には、

八千矛の神のみことは、とほ／＼し、高志コシの國に、美しクハ女メをありと聞かして、賢サカし女メをありと聞キコして……

から謠ひ起す カミガタリウタ 神語歌を、語部に歌はせる風が、次第にひろま

つて來るのを、防ぎとめることが出來なくなつて居た。

南家の郎女 イラツメ にも、さう言ふ妻覓ぎ ツママ 人が——いや ヒトムレ 人群が、とり

まいて居た。唯、あの型ばかり取り残された石城 シキ の爲に、何だか

屋敷へ入ることが、物忌み——たぶう——を犯すやうな危殆 ヒアヒ な心

持ちで、誰も彼も、柵まで又、門まで來ては、かいまみしてひき

還すより上の勇氣が、出ぬのであつた。

通 カヨ はせ文 ブミ をおこすだけが、せめてものでだてゞ、其さへ無事に、

姫の手に届いて、見られてゐると言ふ、自信を持つ人は、一人と

してなかつた。事實、大抵、女部屋の老女 トジ たちが、引つたくつて

渡させなかつた。さうした文のとりつきをする若人 ワカウド ——若女房——

を呼びつけて、荒けなく叱つて居る事も、度々見かけられた。

オモト

其方は、この姫様こそ、藤原の氏神にお仕へ遊ばす、清らかな

トコヲトメ

常處女と申すのだ、と言ふことを知らぬのかえ。神の咎めを

憚るがえゝ。宮から恐れ多いお召しがあつてすら、ふつにおい
らへを申しあげぬのも、それ故だとは考へつかぬげな。やくた
い者。とつとゝ失せたがよい。そんな文とりついで手を、率川
の一の瀬で淨めて來くさう。罰バチ知らずが……。

こんな風に、わなりつけられた者は、併し、二人や三人ではなかつた。横佩家の女部屋に住んだり、通うたりしてゐる若人は、一人残らず一度は、經驗したことだと謂つても、うそではなかつた。だが、郎女は、つひに一度そんな事のあつた様子も、知らされず

に來た。

上つ方の郎女イラツメが、才ザエをお習ひ遊ばすと言ふことが御座りませうか。それは近代、ずっと下シモさまのをなごの致すことゝ承ります。父君がどう仰らうとも、父御様テ、ゴのお話は御一代。お家の習しは、神さまの御意趣オムネ、とお思ひつかはされませ。

氏の掟の前には、氏ウチノカミ上たる人の考へをすら、否みとほす事もある姥たちであつた。

其老女たちすら、郎女の天稟には、舌を捲きはじめて居た。

もう、自身たちの教へることもなうなつた。

かう思ひ出したのは、數年も前からである。内に居る、身狭乳母ムサノチオモ・桃花鳥野乳母ツキノノマ・波田坂上刀自ハタノサカノヘノ、皆故知らぬ喜びの不安から、

歎息し續けてゐた。時々伺ひに出る中臣志斐^{シヒノオムナ}・三上水凝^{ミカミノミツゴリノ}刀自女^{トジメ}なども、來る毎、目を見合せて、ほうつとした顔をする。

どうしよう、と相談するやうな人たちではない。皆無言で、自分等の力の及ばぬ所まで來た、姫の魂の成長にあきれて、目をみはるばかりなのだ。

才^{ザエ}を習ふなど言ふなら、まだ聞きも知らぬこと、教へて賜^{タモ}れ。

素直な郎女の求めも、姥たちにとつては、骨を刺しとほされるやうな痛さであつた。

何を仰せられます。以前から、何一つお教へなど申したことがおざりませうか。目下^{メシタ}の者が、目上のお方さまに、お教へ申すと云ふやうな考へは、神様がお聞き届けになりません。教へ

る者は目上、ならふ者は目下、と此が、神の代からの掟でござりまする。

志斐^{オムナ}姫の負け色を救ふ爲に、身狭^{ムサノチオモ}乳母も口を插む。

唯知つた事を申し上げるだけ。其を聞きながら、御心がお育ち遊ばす。さう思うて、姥たちも、覺えたゞけの事は、郎女様の^{タマ}み魂を^{イッ}揺る様にして、歌ひもし、語りもして参りました。教へたなど仰つては私めらが、^{バチ}罰を蒙らねばなりません。

こんな事をくり返して居る間に、刀自たちにも、自分らの恃む知識に對する、單純な自覺が出て來た。此は一層、郎女の望むまゝに、^{ザエ}才を^{ナラハ}習した方が、よいのではないか、と言ふ氣が、段々して來たのである。

まことに其爲には、ゆくりない事が、幾重にも重つて起つた。姫の帳臺の後から、遠くに居る父の心盡しだつたと見えて、二卷のフナナゲ女手の寫經らしい物が出て來た。姫にとつては、肉縁はないが、ヒオホバ曾祖母にも當る橘夫人の法華經、又其御胎オハラにいらせられる——筋から申せば、大叔母御ゴにもお當り遊ばす、今の皇太后様の樂毅論。此二つの卷物が、美しい装ひで、棚を架カいた上に載せてあつた。横佩大納言と謂はれた頃から、父は此二部を、自分の魂のやうに大事にして居た。ちよつと出る旅にも、大きやかな箱に納めて、一人分の資人トネリの荷として、持たせて行つたものである。其魂の書を、姫の守りに留めておきながら、誰にも言はずにゐたのである。さすがに我強ガツコい刀自たちも、此見覚えのある、美しい箱が出る。

て來た時には、暫らく撲たれたやうに、顔を見合せて居た。さうして後、^{ノチ}後で恥し^{アト}からうことも忘れて、皆聲をあげて泣いたものであつた。

郎女は、父の心入れを聞いた。姥たちの見る目には、併し豫期したやうな興奮は、認められなかつた。唯一途^ツに素直に、心の底の美しさが匂ひ出たやうに、靜かな、美しい眼で、人々の感激する様子を、驚いたやうに見まはして居た。

其からは、此二つの女^{ヲシナデ}手の「本」^{ホン}を、一心に習ひとほした。偶然^ヒは友を誘くものであつた。一月も立たぬ中の事である。早く、此都に移つて居た飛鳥寺^{アスカデラ}—元興寺^{グワンコウジ}—から卷數^{クワンズ}が届けられた。其には、難波にある帥の殿の立願^{リフグワン}によつて、佛前に讀誦した

經文の名目が、書き列ねてあつた。其に添へて、一卷の縁起文が、此御館へ届けられたのである。

父藤原豊成朝臣、亡父贈太政大臣七年の忌みに當る日に志を發しオコて、書き綴つた「佛本傳來記」を、其後二年立つて、元興寺グワンコウジへ納めた。飛鳥以來、藤原氏とも關係の深かつた寺なり、本尊なのである。あらゆる念願と、報謝の心を籠めたもの、と言ふことは察せられる。其一卷が、どう言ふ訣ワケか、二十年もたつてゆくりなく、横佩家へ戻つて來たのである。

郎女の手キザに、此卷が渡つた時、姫は端近く膝行キザり出て、元興寺の方を禮拜した。其後で、

難波とやはらは、どちらに當るかえ。

と尋ねて、示す方角へ、生き／＼した顔を向けた。其目からは、
 珠數の珠の水スキシヤウ精のやうな涙が、こぼれ出てゐた。

其からと言ふものは、來る日もくる日も、此元興寺の縁起文を手
 寫した。内典・外典其上に又、大日本オホヤマトびとなる父の書いた文。モン

指から腕、腕から胸、胸から又心へ、沁み／＼と深く、魂を育
 てる智慧の這入つて行くのを、覺えたのである。

大日本オホヤマトヒタカミ日高見の國。國々に傳はるありとある歌ウタ諺コトワザ、又其舊ソノモト
ツゴト

辭。第一には、中臣の氏の神語り。藤原の家の古物語り。多く
 の語り詞を、絶えては考へ繼ぐ如く、語り進んでは途切れ勝ちに、
ノロ、呪々しく、くね／＼しく、獨り語りする語部や、乳母オモや、嚼母マ、
 たちの唱へる詞が、今更めいて、寂しく胸に蘇つて來る。

を、あれだけの習しを覚える、たゞ其だけで、此世に生きながらへて行かねばならぬみづからであつた。

父に感謝し、次には、尊い大叔母君、其から見ぬ世の曾祖母の尊オホオバに、何とお禮申してよいか、量り知れぬものが、心にたぐり上げて来る。だがまづ、父よりも誰よりも、御禮申すべきは、み佛である。この珍貴ウツの感覺サトリを授け給ふ、限り知られぬ愛メゲみに充ちたよき人が、此世界の外に、居られたのである。郎女は、塗香ツカウをとり寄せて、まづ髪に塗り、手に塗り、衣を薰るばかりに匂はした。

ほゝき ほゝきい ほゝほきい——。

きのふよりも、澄んだよい日になった。春にしては、驚くばかり濃い日光が、地上にかつきりと、木草の影を落して居た。ほか／＼した日よりなのに、其を見てみると、どこか、薄ら寒く感じるほどである。時々過ぎる雲の翳りもなく、晴れきつた空だ。高原を拓いて、間引いた疎らな木原コハラの上には、もう澤山の羽蟲が出て、のぼつたり降つたりして居る。たつた一羽の鶯が、よほど前から一處を移らずに、鳴き續けてゐるのだ。

家の刀トジ自たちが、物語る口癖を、さつきから思ひ出して居た。出雲宿禰の分れの家の嬢子フトメが、多くの男の言ひ寄るのを煩しがつて、身をよけ／＼して、何時か、山の林の中に分け入つた。さうして

其處で、まどろんで居る中に、悠々ウラ、と長い春の日も、暮れてしまつた。嬢子は、家路と思ふ徑を、あちこち歩いて見た。脚は茨の棘にさゝれ、袖は、木の楚ズハエにひき裂かれた。さうしてとうく、里らしい家群ムラの見える小高い岡の上に出た時は、裳も、著物も、肌が出るほど、ちぎれて居た。空には、夕月が光りを増して來てゐる。嬢子はさくり上げて來る感情を、聲に出した。

ほゝき ほゝきい。

何時も、悲しい時に泣きあげて居た、あの聲ではなかつた。「を、此身は」と思つた時に、自分の顔に觸れた袖は袖ではないものであつた。枯れ原ツの冬草の、山肌色をした小な翼であつた。思ひがけない聲を、尚も出し續けようとする口を、押へようすると、

自身すらいとほしんで居た柔らかな唇は、どこかへ行つてしまつて、替りに、さゝやかな管のやうな喙が來てついて居る——。悲しいのか、せつないのか、何の考へさへもつかかなかつた。唯、身悶えをした。するとふはりと、からだは宙に浮き上つた。留めようと、袖をふれば振るほど、身は次第に、高く翔り昇つて行く。五日月の照る空まで……。その後、今の世までも、

ほゝき ほゝきい ほゝほきい。

と鳴いてゐるのだ、と幼い耳に染みつけられた、物語りの出雲の嬢子が、そのまゝ、自分であるやうな氣がして來る。

郎女は、徐かに兩袖を、胸のあたりに重ねて見た。家に居た時よりは、褻れ、皺立つてゐるが、小鳥の羽には、なつて居なかつ

た。手をあげて唇に觸れて見ると、喙でもなかつた。やつぱり、ほつとりとした感觸を、指の腹に覺えた。

ほゝき鳥ドリ—鶯—になつて居た方がよかつた。昔ムカシガタ語りの嬢子は、

男を避けて、山の楚シモトハラ原へ入り込んだ。さうして、飛ぶ鳥にな

つた。この身は、何とも知れぬ人の倂テフトリにあくがれ出て、鳥にもならず、こゝにかうして居る。せめて蝶飛蟲テフトリにでもなれば、ひらくと空に舞ひのぼつて、あの山の頂へ、倂びとをつきとめに行かうもの——。

ほゝき ほゝきい。

自身の咽喉から出た聲だ、と思つた。だがやはり、廬の外で鳴くのであつた。

郎女の心に動き初めた叡サトい光りは、消えなかつた。今まで手習ひした書卷の何處かに、どうやら、法喜と言ふ字のあつた氣がする。法喜——飛ぶ鳥すらも、美しいみ佛の詞に、感カマけて鳴くのではなからうか。さう思へば、この鶯も、

ほゝき ほゝきい。

嬉しタカネさうな高音を、段々張つて來る。

物語りする刀自たちの話でなく、若人ワカウドらの言ふことは、時たま、

世の中の瑞ミツ々しい消セウソク息を傳へて來た。奈良の家の女部屋ワンナベヤは、

裏方五つ間マを通した、廣いものであつた。郎女の帳臺の立ち處ドを

一番奥にして、四つの間に、刀自・若人、凡三十人も居た。若人

等は、この頃、氏ミタチ々の御館ミタチですることだと言つて、苑の池の蓮の

莖を切つて來ては、藕ハスイト絲を引く工夫に、一心になつて居た。横佩家の池の面を埋めるほど、珠を捲いたり、解けたりした蓮の葉は、まばらになつて、水の反射が蔀を越して、女部屋まで來るばかりになつた。莖を折つては、纖維を引き出し、其片糸を幾筋も合せては、絲に搓ヨる。

郎女は、女たちの凝つてゐる手藝を、ぢつと見て居る日もあつた。ほうくと切れてしまふ藕ハスイト絲を、八合コ・十二合コ・二十合ハタコに搓つて、根氣よく、細い綱の様にする。其を績ウみ麻ヲの麻ヲごけに繋ぎためて行く。奈良の御館ミタチでも、蠶カフコは飼つて居た。實際、刀自たちは、夏は殊にせはしく、そのせゐで、不機嫌フキゲンになつて居る日が多かつた。

刀自たちは、初めは、そんな韓カラの技人テビトのするやうな事は、と目もくれなかつた。だが時が立つと、段々興味を惹かれる様子が見えて來た。

こりや、おもしろい。絹の絲と、績ウみ麻ヲとの間を行く様な妙な絲の――。此で、切れさへしなればなう。

かうして績ツムぎ蓄タめた藕絲は、皆一纏めにして、寺々に納めようと、言ふのである。寺には、其ソレ々の技女ギヂヨが居て、其絲で、唐土モロコシヤウ様と言ふよりも、天竺風な織物に織りあげる、と言ふ評判であつた。女たちは、唯功德クドクの爲に絲を績ツムいでゐる。其でも、其が幾かせ、幾たまと言ふ風に貯つて來ると、言ひ知れぬ愛著を覺えて居た。だが、其がほんとは、どんな織物になることやら、其處までは想

像も出来なかつた。

若人たちは莖を折つては、巧みに糸を引き切らぬやうに、長く／＼と引き出す。又其、粘り氣の少いさくいものを、まるで絹糸を縫り合せるやうに、手際よく絲にする間も、ちつとでも口やめる事なく、うき世語りなどをして居た。此は勿論、貴族の家庭では、出来ぬ掟になつて居た。なつては居ても、物珍モノメでする盛りの若人たちには、口を塞いで緘シバ黙マ行を守ることは、死ぬよりもつらい行であつた。刀自らの油斷を見ては、ぼつ／＼話をしてゐる。其きれ／＼が、聞かうとも思はぬ郎女の耳にも、ぼつ／＼這入つて來キ勝ちなのであつた。

鶯の鳴く聲は、あれで、法華經ホケキヤウ々々々と言ふのぢやて——。

ほゝ、どうして、え——。

天竺のみ佛は、をなごは、助からぬものぢやと、説かれくして來たがえ、其果てに、女でも救ふ道が開かれた。其を説いたのが、法華經ぢやと言ふげな。

——こんなこと、をなごの身で言ふと、さかしがりよと思はうけれど、でも、世間では、さう言ふもの——。

ぢやで、法華經々々々と經の名を唱へるだけで、この世からして、あの世界の苦しみが、助かるといの。

ほんまにその、天竺のをなごが、あの鳥に化り變つて、み經の名を呼ばゝるのかえ。

郎女には、いつか小耳に挿んだ其話が、その後、何時までも消え

て行かなかつた。その頃ちようど、稱讚淨土佛攝受經シヨウサンジャウドブツセフジユギヤウを、千部寫さうとの願を發オコして居た時であつた。其が、はかどらぬ。何時までも進まぬ。茫とした耳に、此世話ヨバナシが再また、紛れ入つて來たのであつた。

ふつと、こんな氣がした。

ほゝき鳥は、先の世で、御經オンキヤウ手寫の願を立てながら、え果ハタ

さいで、死にでもした、いとしい女子がなつたのではなからうか。……さう思へば、若しや今、千部に満たずにしまふやうなことがあつたら、我が魂タマは何になることやら。やつぱり、鳥か、蟲にでも生れて、切セツなく鳴き續けることであらう。

つひに一度、ものを考へた事もないのが、此國のあて人の娘であ

つた。磨かれぬ智慧を抱いたまゝ、何も知らず思はずに、過ぎて行つた幾百年、幾萬の貴い女ニヨシヤウ性ハチスの間に、蓮の花がほつちりと、蒼モタを擡げたやうに、物を考へることを知り初めた郎女であつた。をれよ。鶯よ。あな姦カマや。人に、物思ひをつけくさる。

荒々しい聲と一しよに、立つて、表戸と直角カネになつた草壁シトミの部戸ドをつきあげたのは、當麻語部の媼タギマノカタリオムナである。北側に當るらしい。其外側は、牕を壓するばかり、篠竹が繁つて居た。澤山の葉筋ハスヂが、日をすかして一時にきらくと、光つて見えた。

郎女は、暫らく幾本とも知れぬその光りの筋の、閃き過ぎた色を、マブタ暈マブタの裏に、見つめて居た。をとゝひの日の入り方、山の端に見た輝きが、思はずには居られなかつたからである。

また一時、イットキ 廬堂イホリダウを つて、音するものもなかつた。日は段々タ闌けて、小晝コヒルの温みヌクが、ほの暗い郎女の居處にも、ほつとりと感カじられて來た。

寺の奴ヤツコが、三四人先に立つて、僧綱が五六人、其に、大勢の所化たちのとり捲いた一群れが、廬へ來た。

これが、フル古山田寺だ、と申します。

勿體ぶつた、しわがれ聲が聞えて來た。

そんな事は、どうでも——。まづ、イラツメ郎女メさまを——。

噛みつくやうにあせつて居る家長老イヘオトナ額田部ヌカタベノコフル子古コフルのイがなり聲コがした。

同時に、表戸は引き剥がされ、其に隣つた、幾つかのタツゴモ豎薦モをひ

きちぎる音がした。

づうと這ひ寄つて來た身狭乳母ムサノチオモは、郎女の前に居たけを聳かして、掩ひになつた。外光の直射を防ぐ爲と、一つは、男たちの前、殊には、庶民の目に、貴人アテビトの姿を暴すサラまい、とするのであらう。伴トモに立つて來た家人ケニンの一人が、大きな木の叉枝マタブリをへし折つて來た。さうして、旅用意の卷帛マキギヌを、幾垂れか、其場で之に結び下げた。其を牀ユカにつきさして、即座の豎帷タツバリ——几帳——は調つた。乳母オモは、其前に座を占めたまゝ、何時までも動かなかつた。

怒りの瀧のやうになつた額田部子古は、奈良に還つて、公に訴へると言ひ出した。大和國にも斷つて、寺の奴ばらを追ひ放つて貰ふとまで、いきまいた。大師タイシを頭カシラに、横佩家に深い筋合ひのある貴族たちの名をあげて、其方々からも、何分の御吟味を願はずには置かぬ、と凄い顔をして、住侶たちを脅かした。

郎女は、貴族の姫で入らせられようが、寺の淨域を穢し、結界まで破られたからは、直にお還りになるやうには計はれぬ。寺の四至の境に在る所で、長期の物忌みして、その贖アガナひはして貰はねばならぬ、と寺方も、言ひ分はひつこめなかつた。

理分にも非分にも、これまで、南家の權勢でつき通して來た家長オト老等ナにも、寺方の扱ひと言ふものゝ、世間どほりにはいかぬ事が

訣つて居た。乳母オモに相談かけても、一代さう言ふ世事に與つた事のない此人は、そんな問題には、詮カヒない唯の女ニヨシヤウ性に過ぎなかつた。

先刻サツキからまだ立ち去らずに居た當麻語部の嫗が、口を出した。

其は、寺方が、理分でおざるがや。お随ひなされねばならぬ。

其を聞くと、身狭乳母は、激しく、田舎語部キナカカタリベの老女を叱りつけた。男たちに言ひつけて、疊にしがみつぎ、柱にかき継る古婆フルババを掴み出させた。さうした威高さは、さすがに自ら備つてゐた。

何事も、この身などの考へではきめられぬ。帥ソウの殿トクに承らうにも、國遠し。まづ姑シバし、郎女様のお心による外はないもの、と思ひまする。

其より外には、方ハウもつかかなかつた。奈良の御館の人々と言つても、多くは、此人たちの意見を聽いてする人々である。よい思案を、考へつきさうなものも居ない。難波へは、直様、使ひを立てることにして、とにもかくにも、當座は、姫の考へに任せよう、と言ふことになつた。

郎女様。如何お考へ遊ばしまする。おして、奈良へ還れぬでも御座りませぬ。尤、寺方でも、候サブラヒット人や、奴隸ヤツコの人数を揃へて、妨げませう。併し、御館ミタチのお勢ひには、何程の事でも御座りませぬ。では御座りまするが、お前さまのお考へを承らずには、何とも計ひかねまする。御思案お洩し遊ばされ。

謂はゞ、難題である。あて人の娘御に、出來よう筈のない返答で

ある。乳母オモも、子古コフルも、凡は無駄な伺ひだ、と思つては居た。ところろが、郎女の答へは、木魂返コダマガハしの様に、躊躇タメラふことなしにあつた。其上、此ほどはつきりとした答へはない、と思はれる位、凜としてゐた。其が、すべての者の不満を壓倒した。

姫の咎は、姫が贖アガナふ。此寺、此二上山の下に居て、身の償ツゲナひ、

心の償ひした、と姫が得心するまでは、還るものとは思オモやるな。

郎女の聲・詞を聞かぬ日はない身狭乳母ムサノチオモではあつた。だがつひし

か此ほどに、頭の髓まで沁み入るやうな、さえ／＼とした語を聞いたことのない、乳母チオモだつた。

寺方の言ひ分に譲るなど言ふ問題は、小さい事であつた。此爽やかな育ての君の判断力と、惑ひなき詞に感じてしまつた。たゞ、涙。

かうまで賢^{サカ}しい魂を窺ひ得て、頬に傳ふものを拭ふことも出来なかつた。子古にも、郎女の詞を傳達した。さうして、自分のまだ曾て覺えたことのない感激を、力深くつけ添へて聞かした。

ともあれ此上は、難波津へ。

難波へと言つた自分の語に、氣づけられたやうに、子古は思ひ出した。今日か明日、新羅問罪の爲、筑前へ下る官使の一行があつた。難波に留つてゐる帥の殿も、次第によつては、再太宰府へ出向かれることになつてゐるかも知れぬ。手遅れしては一大事である。此足ですぐ、北へ　つて、大阪越えから河内へ出て、難波まで、馬の叶ふ處は馬で走らう、と決心した。

萬法藏院に、唯一つ飼つて居た馬の借用を申し入れると、此は快

く聴き入れてくれた。今日の日暮れまでには、立ち還りに、難波へ行つて来る、と齒のすいた口に叫びながら、郎女のタツバリ豎帷に向けて、庭から匍伏した。

子古の發つた後は、又のどかな春の日に戻つた。悠ウラ、々と照り暮す山々を見せませう、と乳母が言ひ出した。木立ち・山陰から盗み見する者のないやうに、家人ケニンらを、一町・二町先まで見張りに出して、郎女を、外に誘ひ出した。

アラシ暴風雨の夜、ソフノシモ添下・廣瀬・葛城の野山を、かちあるきした娘御ではなかつた。乳母と今一人、若人の肩に手を置きながら、歩み出た。

日の光りは、霞みもせず、陽炎も立たず、唯をどんで見えた。昨

日眺めた野も、斜になつた日を受けて、物の影が細長く靡いて居た。青垣の様にとりまく山々も、愈々遠く裾を曳いて見えた。

早い葦―げんげ―が、もうちらほら咲いてゐる。遠く見ると、その赤々とした紫が一續きに見えて、夕焼け雲がおりて居るやうに思はれる。足もとに一本、おなじ花の咲いてゐるのを見つけた郎女は、膝を叢について、ぢつと眺め入つた。

これはえ――。

すみれ、と申すとのことで御座ります。

かう言ふ風に、物を知らせるのが、あて人に仕へる人たちの、爲來りになつて居た。

ハチス蓮の花に似てゐながら、もつと細コマやかな、――繪にある佛の花

を見るやうな——。

ひとり言しながら、ぢつと見てゐるうちに、花は、廣い萼ウテナの上に乗つた佛の前の大きな花になつて來る。其がまた、ふつと、目の前のさゝやかな花に戻る。

夕風が冷ヒヤついて參ります。内へと遊ばされ。

乳母が言つた。見渡す山は、皆影濃くあざやかに見えて來た。

近々と、谷を隔てゝ、端山の林や、崖ナギの幾重も重つた上に、二フタカ上の男嶽ヲノカミの頂が、赤い日に染つて立つてゐる。

今日は、又あまりに靜かな夕ユフベである。山ものどかに、夕雲の中に這入つて行かうとしてゐる。

まうしゝ。もう外に居る時では御座りません。

十三

「朝目よく」うるはしい兆シルシを見た昨日は、郎女にとつて、知らぬ経験を、後から後から展いて行つたことであつた。たゞ人の考ピトへから言へば、苦しい現實のひき續きではあつたのだが、姫にとつては、心驚く事ばかりであつた。一つく變つた事に逢ふ度に、「何も知らぬ身であつた」と姫の心の底の聲が揚つた。さうして、その事毎に、挨拶をしてはやり過したい氣が、一ぱいであつた。今日も其續きを、くはしく見た。

なごり惜しく過ぎ行く現ウツし世のさま／＼。郎女は、今日を閉ぢ

て、心に一つく収めこまうとして居る。ほのかに通り行き、將ハタ著しくはためき過ぎたもの——。宵闇の深くならぬ先に、廬イホリのまはりは、すつかり手入れがせられて居た。燈臺も大きなのを、寺から借りて来て、煌々と、油火ビが燃えて居る。明王像も、女人のお出での場處には、すさまじいと言ふ者があつて、どこかへ搬んで行かれた。其よりも、郎女の爲には、帳臺シツラの設備はれてゐる安らかさ。今宵は、夜も、暖かであつた。帷帳トバリを周らした中は、ほの暗かつた。其でも、山の鬼神モノ、野の魍魎モノを避ける爲の燈の渦が、ぼうと梁に張り渡した頂板ツシイタに揺めユラいて居るのが、たのもししい氣を深めた。帳臺のまはりには、乳母や、若人が寝たらしい。其ももう、一時ヒト、キも前の事で、皆すやくと寢息の音を立て、居る。姫

の心は、今は輕かつた。

たとへば、佛に見たお人には逢はずとも、その佛を見た山の麓に來て、かう安らかに身を横へて居る。

燈臺の明りは、郎女の額の上に、高く朧ろに見える光りの輪を作つて居た。月のやうに圓くて、幾つも上へくと、グワチリン月輪の重

つてゐる如くも見えた。其が、隙間風の爲であらう。時々薄れて行くと、一つの月になつた。ぼうつと明り立つと、幾重にも隈の疊まつた、大きな圓かな光明になる。

幸福に充ちて、忘れて居た姫の耳に、今宵も谷の響きが聞え出した。更けた夜空には、今頃やつと、遅い月が出たことであらう。物の音。——つた つたと來て、ふうと佇タち止るけはひ。耳をす

ますと、元の寂かな夜に、——タギクダ激ち降る谷のとよみ。

つた つた つた。

又、ひたと止ヤむ。

この狭い廬の中を、何時まで歩く、跫音だらう。

つた。

郎女は刹那、思ひ出して帳臺の中で、身を固くした。次にわぢ／＼と戦ヲノきが出て來た。

アメワカミコ天若御子——。

ようべ、タギマノカタリノオムナ當麻語部姫の聞いた物語り。あゝ其お方の、來て

窺ふ夜なのか。

——青馬のミ、モノトジ耳面刀自。

刀自もがも。女弟もがも。

その子の はらからの子の

處女子ヲトメゴの 一人

一人だに わが配偶ツマに來よ

まことに畏しいと言ふことを覺えぬ郎女にしては、初めてまぎ／＼と、壓へられるやうな畏コハさを知つた。あゝあの歌が、胸イに生イき蘇カハつて來る。忘れたい歌の文句が、はつきりと意味を持つて、姫の唱へぬ口の詞から、胸にとほつて響く。乳房から迸り出ようとするとときめき。

帷帳トバリがふはと、風を含んだ様に皺だむ。

ついと、凍る様な冷氣——。

郎女は目を瞑つた。だが——瞬間睫の間から映つた細い白い指、まるで骨のやうな——帷帳トバリを掴んだ片手の白く光る指。

なも 阿彌陀ほとけ。あなたふと 阿彌陀ほとけ。

何の反省もなく、唇を洩れた詞。この時、姫の心は、急に寛ぎを感じた。さつと——汗。全身に流れる冷さを覺えた。畏コハい感情を持つたことのないあて人の姫は、直スゲに動顛した心を、とり直すことが出来た。

なうく。あみだほとけ……。

今一度口に出して見た。をとゝひまで、手寫しとほした、稱シヨウウサ讚ザン淨ンジャウドキヤウ土ト經モンの文が胸に浮ぶ。郎女は、昨日までは一度も、寺道場を覗いたこともなかつた。父君は家の内に道場を構へて居たが、

簾越しにも聽聞モンは許されなかつた。

御オン經キヤウの文モンは手寫しても、

固より意趣は、よく訣らなかつた。だが、處々には、かつ／＼
氣持ちの汲みとれる所があつたのであらう。さすがに、まさかこ
んな時、突嗟に口に上らう、とは思つて居なかつた。

白い骨、譬へば白玉の竝んだ骨の指、其が何時までも目に残つて
居た。帷帳トバリは、元のまゝに垂れて居る。だが、白玉の指ばかりは
細々と、其に絡んでゐるやうな氣がする。

悲しさとも、懐しみとも知れぬ心に、深く、郎女は沈んで行つた。
山の端に立つた倂びとは、白シロ々とした掌をあげて、姫をさし招
いたと覺えた。だが今、近々と見る其手は、海の渚の白玉のやう
に、からびて寂しく、目にうつる。

長い渚を歩いて行く。郎女の髪は、左から右から吹く風に、あちらへ靡き、こちらへ亂れする。浪はたゞ、足もとに寄せてゐる。渚と申したのは、海の中道ナカミチである。浪は、兩方から打つて來る。どこまでもく、海の道は續く。郎女の足は、砂を踏んでゐる。その砂すらも、段々水に掩はれて來る。砂を踏む。踏むと思つて居る中に、ふと其が、白々とした照る玉だ、と氣がつく。姫は身を屈コムめて、白玉を拾ふ。拾うてもく、玉は皆、掌タナソコに置くと、粉の如く碎けて、吹きつける風に散る。其でも、玉を拾ひ續ける。玉は水隠ミガクれて、見えぬ様になつて行く。姫は悲しさに、もろ手を以て掬スクはうとする。掬ムスんでもく、水のやうに、手タナマタ股から流れ

去る白玉——。玉が再、砂の上につぶ／＼竝んで見える。^{アワタマ}忙しく拾はうとする姫の俯いた背^{ウツム}を越して、流れる浪が、泡立つてとほる。

姫は——やつと、白玉を取りあげた。輝く、大きな玉。さう思うた刹那、郎女の身は、大浪にうち仆される。浪に漂ふ身……衣もなく、裳^モもない。抱き持った等身の白玉と一つに、水の上に照り輝く現^{ウツ}し身。

ずん／＼と、さがつて行く。水^{ミナ}底^{ソコ}に水漬^{ミツ}く白玉なる郎女の身は、やがて又、一^{ヒト}幹^{モト}の白い珊瑚^キの樹である。脚を根、手を枝とした水底の木。頭に生ひ靡くのは、玉藻であつた。玉藻が、深海のうねりのまゝに、揺れて居る。やがて、水底にさし入る月の光

り——。ほつと息をついた。

まるで、潜カッきする海女アマが二十尋・三十尋の水底から浮ウソフび上つて嘯ウソフく様に、深い息の音で、自身明らかに目が覺めた。

あゝ夢だつた。當麻まで來た夜道の記憶は、まぎ／＼と残つて居るが、こんな苦しさは覺えなかつた。だがやつぱり、をとゝひの道の續きを辿つて居るらしい氣がする。

水の面からさし入る月の光り、さう思つた時は、ずん／＼海面に浮き出て來た。さうして悉く、跡形もない夢だつた。唯、姫の仰ツシイタぎ寝る頂板ツシイタに、あゝ、水にさし入つた月。そこに以前のまゝに、幾つカサも暈カサの疊カサまつた月輪の形が、搖ユラめいて居る。

なうく　阿彌陀ほとけ……。

再、口に出た。光りの暈は、今は愈々明りを増して、輪と輪との境の隈クマ々々しい處までも見え出した。黒ずんだり、薄暗く見えたりした隈が、次第に凝り初めて、明るい光明の中に、胸・肩・頭・髪、はつきりと形を現ゲじた。白々と袒ヌいだ美しい肌。淨く伏せたまみが、郎女の寢姿を見おろして居る。かの日の夕ヒユフベ、山の端ハに見た倂オヨビびと——。乳のあたりと、膝元とにある手——その指オヨビ、白玉オヨビの指。

姫は、起き直つた。天井の光りの輪が、元のまゝに、たゞ仄かに、事もなく揺れて居た。

十四

ウマビト
 貴人はうま人どち、やつこは奴隷どち、と言ふからの――。

何時見ても、大師は、微塵曇りのない、圓かな相好である。其
 に、ふるまひのおほどかなこと。若くから氏上で、數十家の
 一族や、日本國中數萬の氏人から立てられて來た家持も、ぢ
 つと對うてゐると、その靜かな威に、壓せられるやうな氣がして
 來る。

言はしておくがよい。奴隷たちは、とやかくと口さがないのが、
 其爲事よ。此身とお身とは、おなじ貴人ぢや。おのづから、話
 も合はうと言ふもの。此身が、段々なり上ると、うま人までが
 おのづとやつこ心になり居つて、いや嫉むの、そねむの。

家持は、此が多聞天か、と心に問ひかけて居た。だがどうも、さうは思はれぬ。同じ、かたどつて作るなら、とつい聯想が逸れて行く。八年前、越中國から歸つた當座の、世の中の豊かな騒ぎが、思ひ出された。あれからすぐ、大佛開^{カイゲン}眼^{ガン}供養が行はれたのであつた。其時、近々と仰ぎ奉つた尊容、八十種^{ハチジフシユガウ}好具足した、と謂はれる其相好が、誰やらに似てゐる、と感じた。其がその時は、どうしても思ひ浮ばずにしまつた。その時の印象が、今ぴつたり、的にあてはまつて來たのである。

かうして對ひあつて居る主人の顔なり、姿なりが、其まゝあの盧^ル遮^サ那^ナほとけの倂だ、と言つて、誰が否まう。

お身も、少し咄したら、えゝではないか。官位^{カウブリ}はかうぶり。

昔ながらの氏は氏——。なあ、さう思はぬか。紫微中臺の、兵部省のと、位づけるのは、うき世の事だは。家ウチに居る時だけは、やはり神代カミヨイライ以來の氏ウチノカミ上ウチづきあひが、えゝ。

新しい唐の制度の模倣ばかりして、漢モロコシ土ザエの才が、やまと心に入り替つたと謂はれて居る此人が、こんな嬉しいことを言ふ。家持は、感謝したい氣がした。理會者・同感者を、思ひまうけぬ處に見つけ出した嬉しさだったのである。

お身は、宋玉や、王褒の書いた物を大分持つて居ると言ふが、太宰府へ行つた時に、手に入れたのぢやな。あんな若い年で、わせだつたのだなう。お身は——。お身の氏では、古麻呂コマロ。身の家に近い者でも奈良麻呂。あれらは漢魏はおろか、今の唐

の小説なども、ふり向きもせんから、言ふがひない話ぢやは。兵部大輔は、やつと話のつきほを捉へた。

お身さまのお話ぢやが、わしは、賦の類には飽きました。どうもあれが、この四十面さげてもまだ、涙もろい歌や、詩の出て来る元になつて居る——さうつく／＼思ひますぢやて。ところで近頃は、方カタを換へて、張文成を拾ひ讀みすることにしました。この方が、なんぼか——。

大きに、其は、身も賛成ぢや。ぢやが、お身がその年になつても、まだ二十代ハタチの若い心や、瑞々しい顔を持つて居るのは、宋玉のおかけぢやぞ。まだなか／＼隠れては歩き居ウる、と人の噂ぢやが、嘘ぢやなからう。身が保證する。おれなどは、張文成

ばかり古くから読み過ぎて、早く精氣の盡きてしまつた心持ちがする。——ぢやが全く、文成はえゝなう。あの仁ジンに會うて來た者の話では、猪肥キノコマえのした、唯の漢モロコシ土びとぢやつたげなが、心はまるで、やまとのものと、一つと思ふが、お身なら、
ウベナ
諾うてくれるだらうの。

文成に限る事ではおざらぬが、あちらの物は、讀んで居て、知らぬ事ばかり教へられるやうで、時々ふつと思ひ返すと、こんな思はざつた考へを、いつの間にか、持つてゐる——そんな空恐しい氣さへすることが、あります。お身さまにも、そんな經驗オボエは、おありでがな。

大ありおほ有り。毎日々々、其よ。しまひに、どうなるのぢや。

こんなな智慧づいては、と思はれてならぬことが——。ぢやが、
ヲミナゴ女子だけには、まづ當分、女部屋のほの暗い中で、こんな智
 慧づかぬ、のどかな心で居させたいものぢや。第一其が、われ
 く男の爲ぢやて。

家持は、此了解に富んだ貴人に向つては、何でも言つてよい、青
 年のやうな氣が湧いて來た。

さやうく。智慧を持ち初めては、あのイブセ驚い女部屋には、ぢつ
 として居ませぬげな。第一、ヨコハキカキツ横佩牆内の——

此はいけぬ、と思つた。同時に、此オク臆れた氣の出るのが、自分を
ヒク卑くし、大伴氏を、昔の位置から自ら蹶落す心なのだ、と感じる。

好、好。エ、エ、遠慮はやめやめ。氏上づきあひぢやもの。ほい又出た。

おれはまだ、藤原の氏上に任せられた訣ぢやあ、なかつたつけの。

瞬間、暗い顔をしたが、直にさつと眉の間から、輝きが出て來た。身の女姪メヒが神隠しにあうたあの話か。お身は、あの謎見たいないきさつを、さう解トるかね。ふん。いやおもしろい。女姪の姫も、定めて喜ぶぢやらう。實はこれまで、内々消息を遣して、小あたりにあたつて見た、と言ふ口かね、お身も。

大きに。

今度は軽い心持ちが、大膽に押勝の話を受けとめた。

お身さまが經驗タメシずみぢやで、其で、郎女の才ザエダカ高さと、男擇びすることが訣りますな——。

此は——。額ヒタヒぎまに切りつけるぞ——。免せくと云ふところ

ぢやが、——あれはの、生れだちから違ふものな。藤原の氏姫

ぢやからの。枚ヒララカ岡の齋イツき姫にあがる宿世スケセを持つて生れた者ゆ

ゑ、人間の男は、弾く、弾く、弾きとばす。近よるまいぞよ。

はゝはゝゝ。

大師は、笑ひをぴたりと止めて、家持の顔を見ながら、きまじめな表情になつた。

ぢやがどうも——。聴き及んでのことゝ思ふが、家出の前まで、阿彌陀經の千部寫經をして居たと言ふし、樂毅論から、兄の殿の書いた元興寺縁起も、其前に手習ひしたらしいし、まだくの孝經などは、これぽつちの頃に習うた、と言ふし、なかくの

女博士ヲナゴハカセでの。楚辭や、小説にうき身をやつす身や、お身は近

よれぬはなう。霜月・師走の垣カイコボチヲナゴ毀雪女メぢやもの。——どう

して、其だけの女子ヲミナゴが、神隠しなどに逢はうかい。

第一、場處が、あの當麻で見つかつたと言ひますからの——。

併し其は、藤原に全く縁のない處でもない。天二上は、中ナカトミ臣

壽詞ノヨゴトにもあるし……。齋イツ姫ヒメもいや、人の妻と呼ばれるのも

いや——で、尼になる氣を起したのでないか、と考へると、も

う不安で不安でなう。のどかな氣持ちばかりでも居られぬて—

—。

押勝の眉は集つて來て、皺一つよせぬ美しい、この老い見えぬ
貴人の顔も、思ひなし、ひずんで見えた。

何しろ、タフヤメ嬪女は國の寶ぢやでなう。出来ることなら、人の物にはせず、神の物にしておきたいところぢやが、——人間の高タ望カノソみは、さうばかりもさせてはおきをらぬがい——。ともかく、むぎ／＼尼寺へやる訣にはいかぬ。

ぢやが、お身さま。一人出家すれば、と云ふ詞が、この頃はやりになつて居りますが……。

九族が天に生じて、何になるといふのぢや。寶は何百人かゝつても、作り出せるものではないぞよ。どだいアニキドノ兄公殿が、少し佛ゴ凝りが過ぎるでなう——。自然内ウチうらまで、そんな氣風がしみこむやうになつたかも知れぬぞ——。時に、お身のみ館イの郎ラツメ女も、そんな育てはしてあるまいな。其では、家ウチの久須麻呂

が泣きを見るからの。

人の悪いからかひ笑みを浮べて、話を無理にでも脇へ釣り出さうと努めるのは、考へるのも切ない胸の中が察せられる。

アニキドノ兄公殿は氏上に、身はウヂノスケ氏助と言ふ訣なのぢやが、肝腎齋

き姫で、枚岡に居させられる叔母御は、もうよい年ぢや。去年

春日祭りに、女使ひで上られた姿を見て、カン神さびたものよ、と

思うたぞ。今モ一代此方から進ぜなかつたら、齋き姫になる娘の

多い北家の方がすぐに取つて替つて、氏上に据るは。

兵部大輔にとつても、此はもう、ヒトゴト他事ではなかつた。おなじ大

伴幾流の中から、四代續いてコタ氏上職を持ち堪へたのも、第一は宮

廷の御恩徳もあるが、世の中コタのよせが重かつたからである。其に

は、一番大事な條件として、美しい齋き姫が、後から後と此家に出で、とぎれることがなかつた爲でもある。大伴の家のは、表向き婿どりさへして居ねば、子があつても、齋き姫は勤まる、と言ふ定めであつた。今の阪上郎女は、二人の女ヲミナゴ子を持つて、やはり齋き姫である。此は、うつかり出來ない。此方コチラも藤原同様、叔母御が齋姫イツキで、まだそんな年でない、と思つてゐるが、又どんなことで、他流の氏姫が、後を襲ふことにならぬとも限らぬ。大伴サヘキ・佐伯の數知れぬ家々・人々が、外の大伴へ、頭をさげるやうになつてはならぬ。かう考へて來た家持の心の動搖などには、思ひよりもせぬ風で、

こんな話は、よそほかの氏上に言ふべきことでないが、アニキド兄公

殿ノがあゝして、此先何年、難波にゐても、太宰府に居ると言ふ
 が表面オモテだから、氏の祭りは、枚岡・春日と、二處に二度づゝ、
 其外マハ、週り年には、時々鹿島・香取の東路アツマヂのはてにある舊モトヤ
 社シロの祭りまで、此方で勤めねばならぬ。實際よそほかの氏上
 よりも、此方コチラの氏助ははたらいてゐるのだが、——だから、自
 分で、氏上の氣持ちになつたりする。——もう一層なつてしま
 ふかな。お身はどう思ふ。こりや、答へる訣にも行くまい。氏
 上に押し直らうとしたところで、今の身の考へ一つを枉げさせ
 るものはない。上様方に於かせられて、お叱りの御沙汰ゴサタを下し
 おかれぬ限りは——。

京中で、此惠美屋敷ほど、庭を嗜んだ家はないと言ふ。門は、左

京二條三坊に、北に向いて開いて居るが、主人家族の住ひは、南を廣く空^アけて、深々とした山齋^{ヤマ}が作つてある。其に入りこみの多い池を周らし、池の中の島も、飛鳥の宮風に造られて居た。東の^{ナカ}中み門、西の^{ナカ}中み門まで備つて居る。どうかすると、庭と申さうより、^{クワン、}寛々とした空き地の廣くおありになる宮よりは、もつと手入れが届いて居さうな氣がする。

庭を立派にして住んだ、うま人たちの末々の様が、兵部大輔の胸に來た。瞬間、憂鬱な氣持ちがかぶさつて來て、前にゐる大師の顔を見るのが、氣の毒な様に思はれる。

案じるなよ。庭が行き届き過ぎて居る、と思つてるのだらう。

そんなことはないさ。庭はよくても、亡びた人ばかりはないさ。

淡海公の御館はどうだ。どの筋でも引き繼がずに、今に荒してはあ
るが、あの立派さは。それあの山部の何とか言つた、地下^{ヂゲ}の召^メし人^{ビト}の歌よみが、おれの三十になつたばかりの頃、「昔見^{フル}し
舊^{フル}き堤は、年深み……年深み、池の渚に、水草^{ミクサ}生ひにけり」と
よんだ位だが、其後が、これ此様に、四流にも岐れて榮えてある。もつとあるぞ——。なに、庭などによるものぢやないは。恃^{タノ}む所の深い此あて人は、庭の風景の、目立つた個處々々を指摘しながら、其據る所を、日本^{ヤマト}・漢^{モロコシ}土に涉つて説明した。
長い廊を、數人の童^{ワラハ}が續いて來る。

日ずかしです。お召しあがり下されませう。

改つて、簡単な饗應の挨拶をした。まらうどに、早く酒を獻じな

さい、と言つてゐる間に、美しい采女ウネメが、盃を額より高く捧げて出た。

を、それだけ受けて頂けばよい。舞ひぶりを一つ、見て貰ひなさい。

家持は、何を考へても、先を越す敏感な主人に對して、唯虚心で居るより外は、なかつた。

うねめは、大伴の氏上へは、まだくださらぬのだつたね。藤原では、存知でもあらうが、先例が早くからあつて、淡海公が、近江の宮から頂戴した故事で、頂く習慣になつて居ります。

時々、こんな畏まつたもの言ひもまじへる。兵部大輔は、自身の語づかひにも、シヨツチユウ初中終、氣扱ひをせねばならなかつた。

氏上もな、身が執心シツシンで、兄公殿を太宰府へ追ひまくつて、後にすわらうとするのだ、と言ふ奴があるといの——。やつぱり「奴はやつこどち」ぢやの。さう思ふよ。時に女姪メヒの姫だが——。

さすがの聰明第一の大師も、酒の量は少かつた。其が、今日は幾分いけた、と見えて、話が循環して來た。家持は、一度はぐらかされた緒イトグチ口に、とりついた氣で、

横佩牆内カキツの郎女イラツメは、どうなるでせう。社・寺、それとも宮——。どちらへ向いても、神さびた一生。あつたら惜しいもので
おありだ。

氣にするな。氣にするな。氣にしたとて、どう出来るものか。

此は——もう、人間の手へは、戻らぬかも知れんぞ。

未は、獨り言になつて居た。さうして、急に考へ深い目を凝した。池へ落した水音は、未がさがると、寒々と聞えて來る。

早く、躑躅の照る時分になつてくれぬかなあ。一年中で、この庭の一番よい時が、待ちどほしいぞ。

大師藤原惠美押勝朝臣の聲は、若々しい、純な欲望の外、何の響きもまじへて居なかつた。

十五

つた つた つた。

郎女は、^{ヒタスラ}一向、あの音の歩み寄つて来る畏しい夜更けを、待つやうになつた。をとゝひよりは昨日、昨日よりは今日といふ風に、其登音が間遠になつて行き、此頃はふつに音せぬやうになつた。その氷の山に對うて居るやうな、骨の疼く戦慄の快感、其が失せて行くのを慮れるやうに、姫は夜毎、鶏のうたひ出すまでは、殆、祈る心で待ち續けて居る。

絶望のまゝ、幾晩も仰ぎ寝たきりで、目は晝よりも寤^サめて居た。

其間に起る夜の間の現象には、一切心が留らなかつた。現にあれほど、郎女の心を有頂天に引き上げた頂板^{ツシ}の面^{オモテ}の光り輪にすら、

^{アキシ}明盲ひのやうに、注意は惹かれなくなつた。こゝに來て、疾^トくに、七日は過ぎ、十日・半月になつた。山も、野も、春のけしきが整

うて居た。野茨の花のやうだつた小櫻が散り過ぎて、其に次ぐ山櫻が、谷から峰かけて、斷續しながら咲いてゐるのも見える。麥^ム原^{ギフ}は、驚くばかり伸び、里人の野爲事に出た姿が、終日、そのあたりに動いてゐる。

都から來た人たちの中、何時までこの山陰に、春を起き臥すことか、と佗びる者が殖えて行つた。廬堂の近くに掘り立てた板屋に、かう長びくと思はなかつたし、まだどれだけ續くかも知れぬ此生活に、家ある者は、妻子に會ふことばかりを考へた。親に養はれる者は、家の父母の外にも、隠れた戀人を思ふ心が、切々として來るのである。女たちは、かうした場合にも、平氣に近い感情で居られる長い暮しの習しに馴れて、何かと爲事を考へてはして居

る。女方の小屋は、男のとは別に、もつと廬に接して建てられて居た。

ムサノチオモ
身狭乳母の思ひやりから、男たちの多くは、唯さへ小人数な奈良の御館ミタチの番に行け、と言つて還され、長老オトナ一人の外は、唯雜用ザフヨウをする童と、奴隸位ヤツコしか残らなかつた。

オモ
乳母や、若人たちも、薄々は帳臺の中で夜を久しく起きてゐる、郎女の様子を感じ出して居た。でも、なぜさう夜深く溜め息ついたり、うなされたりするか、知る筈のない昔かたぎの女たちである。

やはり、郎女の魂タマがあくがれ出て、心が空しくなつて居るものと單純に考へて居る。ある女は、魂タマごひの爲に、山尋ねの咒術オコナヒ

をして見たらどうだらう、と言つた。

乳母は一口に言ひ消した。姫様、當麻に御安著なされた其夜、奈良の御館へ計はずに、私にした當麻眞人タギマノマヒトの家人たちの山尋ねが、わるい結果を呼んだのだ。當麻語部とか謂つた蠱物マジモノ使ひのやうな婆が、出しやばつての差配が、こんな事を惹き起したのだ。

その節、山の峠タワの塚で起つた不思議は、噂になつて、この貴人ウマビト一

家の者にも、知れ渡つて居た。あらぬ者の魂を呼び出して、郎女様におつけ申しあげたに違ひない。もうく、輕はずみな咒術オコナヒ

は思ひとまることにしよう。かうして、魂タマの游離アクガれ出た處の近くにさへ居れば、やがては、元のお身になり戻り遊されることだらう。こんな風に考へて、乳母は唯、氣長に氣ながに、と女たちを

諭しくした。

こんな事をして居る中に、早一月も過ぎて、櫻の後、暫らく寂しかった山に、躑躅が燃え立つた。足も行かれぬ崖の上や、巖の腹などに、一ヒトムラ群々々咲いて居るのが、奥山の春は今だ、となつて居るやうである。

ある日は、山へくと、里の娘ばかりが上つて行くのを見た。凡數十人の若い女が、何處で宿つたのか、其次の日、てんでに赤い山の花を髪にかざして、降りて來た。廬の庭から見あげた若女房の一人が、山の躑躅林ツ、ジバヤシが練つて降るやうだ、と聲をあげた。

ぞよ／＼と廬の前を通る時、皆頭をさげて行つた。其中の二三人が、つくねんとして暮す若人たちの慰みに呼び入れられて、板

屋の端へ來た。當麻の田居も、今は苗代時である。やがては田植
ゑをする。其時は、見に出やしやれ。こんな身でも、其時はずん
と、をなごぶりが上るぞな、と笑ふ者もあつた。

こゝの田居の中で、植ゑ初めの田は、腰折れ田と言うて、都ま
でも聞えた物語りのある田ぢやげな。

若人たちは、又例のマジモノウバ蟲物姥の古語りであらう、とまぜ返す。と
もあれ、かうして、山ごもりに上つた娘だけに、今年の田の早處サウ
女トメが當ります。其しるしが此ぢや、と大事さうに、頭の躑躅に觸
れて見せた。

もつと變つた話を聞かせぬかえと誘はれて、身分に高下はあつて
も、同じ若い同士のことゝて、色々な田舎咄をして行つた。其を

後に乳母^{ノチオモ}たちが聴いて、氣にしたことがあつた。山ごもりして居ると、小屋の上の崖をどう／＼と踏みおりて来る者がある。ようべ、眞夜中のことである。一様にうなされて、苦しい息をついてみると、音はそのまゝ、眞下へく、降つて行つた。がらくと、岩の崩^クえる響き。——ちようど其が、此廬堂の眞上の高處^{タカ}に當つて居た。こんな處に道はない筈ぢやが、と今朝起きぬけに見ると、案^{ヂヤウ}の定、赤岩の大崩崖^{オホナギ}。ようべの音は、音ばかりで、ちつとも痕は残つて居なかつた。

其で思ひ合せられるのは、此頃ちよくく、子から丑の間に、里から見えるこのあたりの峰^{ヤマ}の上に、光り物がしたり、時ならぬ一^{イチ}ツトキオロシ^{ツトキオロシ}時^{トキ}嵐^{ハルカ}の凄^{シバシバ}い唸^{ウナ}りが、聞えたりする。今までつひに聞かぬこと。

里人は唯かう、恐れ謹しんで居る、とも言つた。

こんな話を残して行つた里の娘たちも、苗代田の畔に、めい／＼のかざしの躑躅花を挿して歸つた。其は晝のこと、田舎は田舎らしい閨の中に、今は寢ついたであらう。夜はひた更けに、更けて行く。

晝の恐れのならに、寢苦しがつて居た女たちも、おびえ疲れに寢入つてしまつた。頭上の崖で、寢鳥の鳴き聲がした。郎女は、まどろんだとも思はぬ目を、ふつと開いた。續いて今ひと響き、びしとしたのは、鳥などの、翼ぐるめひき裂かれたらしい音である。だが其だけで、山は音どころか、生き物も絶えたやうに、虚しい空間の闇に、時間が立つて行つた。

郎女の額のヌカの上の天井の光りの暈が、ほの／＼と白んで来る。明りの隈はあちこちに偏倚カタヨつて、光りを豎にくぎつて行く。と見る間に、ぱつと明るくなる。そこに大きな花。蒼白い莖。その花びらが、幾つにも分けて見せる隈、佛の花の青蓮華シヤウレンゲと言ふものであらうか。郎女の目には、何とも知れぬ淨らかな花が、車輪のやうに、宙にぱつと開いてゐる。仄暗い葢の處に、むらくくと雲のやうに、動くものがある。黄金の葢をふりわける。其は黄金の髪である。髪の中から匂ひ出た莊嚴な顔。閉ぢた目が、憂ひを持つて、見おろして居る。あゝ肩・胸・顯はな肌。——冷え／＼とした白い肌。をゝおいとほしい。

郎女は、自身の聲に、目が覺めた。夢から續いて、口は尚夢のや

うに、語を逐うて居た。

おいとほしい。お寒からうに――。

十六

山の躑躅の色は、様々ある。一つ色のものだけが、一時に咲き出して、一時に萎^{シボ}む。さうして、凡一月は、後から後から替つた色のが匂ひ出て、禿げた岩も、一冬のうら枯れをとり返さぬ柴木山も、若夏の青雲の下に、はでなかざしをつける。其間に、藤の短い花房が、白く又紫に垂れて、古い木の幹の高さを、せつなく、寂しく見せる。下草に交つて、馬^{アシビ}醉木が雪のやうに咲いても、花

めいた心を、誰に起させることもなしに、過ぎるのがあはれである。

もう此頃になると、山は厭はしいほど緑に埋れ、谷は深々と、繁りに隠されてしまふ。郭クワツコウ公は早く鳴き噎らし、時鳥が替つて、日も夜も鳴く。

草の花が、どつと怒濤の寄せるやうに咲き出して、山全體が花原見たやうになつて行く。里の麥は刈り急がれ、田の原は一様に青みわたつて、もうこんな伸びたか、と驚くほどになる。家の庭ソノ苑にも、立ち替り咲き替つて、栽カ木、草花が、何處まで盛り續けるかと思はれる。だが其も一盛りで、坪はひそまり返つたやうな時が来る。池には葦が伸び、蒲が秀ホき、藺ハが抽んで、来る。遅

々として、併し忘れた頃に、俄かに伸し上るやうに育つのは、蓮の葉であつた。

前年から今年にかけて、海の彼方の新羅の暴状が、目立つて棄て置かれぬものに見えて來た。太宰府からは、軍船を新造して新羅征伐の設けをせよ、と言ふ命のお降しを、度々都へ請うておこして居た。此忙しい時に、偶然流人太宰府員外帥として、難波に居た横佩家の豊成は、思ひがけぬ日々を送らねばならなかつた。

都の姫の事は、千古の口から聽いて知つたし、又、京・難波の間を往來する頻繁な公私の使ひに、文をことづてる事は易かつたけれども、どう處置してよいか、途方に昏れた。ちよつと見は何でもない事の様で、實は重大な、家の大事である。其だけに、常の

優柔不斷な心癖は、益々つのるばかりであつた。

寺々の知音に寄せて、當麻寺へ、よい様に命じてくれる様に、と書いてもやつた。又處置方について伺うた横佩墻内の家の長老・トネ刀自たちへは、ひたすら、汝等の主の郎女を護つて居れ、と言ふやうな、抽象風なことを、答へて來たりした。

次の消息には、何かと具體した仰せつけがあるだらう、と待つて居る間に、日が立ち、月が過ぎて行くばかりである。其間にも、姫の失はれたと見える魂が、お身に戻るか、其だけの望みで、人々は、山村に止つて居た。物思ひに、屈託ばかりもして居ぬ若人たちは、もう池のほとりにおり立つて、伸びた蓮の莖を切り集め出した。其を見て居た寺の婢メヤツコ女が、其はまだ若い、まう半月も

おかねばと言つて、寺領の一部に、蓮根ハスネを取る爲に作つてあつた蓮田ハチスダへ、案内しよう、と言ひ出した。

あて人の家自身が、それく、農村の大家オホヤケであつた。其が次第に、官人ツカサビトらしい姿に更つて來ても、家庭の生活には、何時までたつても、何處か農家らしい様子が、残つて居た。家構へにも、屋敷の廣場ニハにも、家の中の雑用具ザフヨウグにも。第一、女たちの生活は、起居タチキふるまひなり、服装なりは、優雅に優雅にと變つては行つたが、やはり昔の農家の家内ヤウチの匂ひがつき纏うて離れなかつた。刈り上げの秋になると、夫と離れて暮す年頃に達した夫人などは、よく其家の遠い田莊ナリドコロへ行つて、數日を過して來るやうな習しも、絶えることなく、くり返されて居た。

だから、刀自たちは固より若人らも、つくねんと女部屋の薄暗がり、明し暮して居るのではなかつた。てんでに、自分の出た村方の手藝を覚えて居て、其を、仕へる君の爲に爲出さうシイダ、と出精してはたらいた。

裳の襷を作るのに珍ナい術テを持った女などが、何でもないこと、とりわけ重寶がられた。袖の先につける鱗ハタソデ袖を美しく爲立て、其に、珍しい縫ひとりをする女なども居た。こんなのは、どの家庭にもある話でなく、かう言ふ若人をおきあてた家は、一つのよい見てくれを世間に持つ事になるのだ。一般に、染めや、裁ち縫ひが、家々の顔見合はぬ女どうしの競技のやうに、もてはやされた。摺り染めや、擣ウち染めの技術も、女たちの間には、目立たぬ

進歩が年々にあつたが、浸^ヒで染めの爲の染料が、韓^テの技^ビ工人の影
響から、途方もなく變化した。紫と謂つても、茜と謂つても皆、
昔の様な、染め漿^{シホ}の處^{トリ}置^{アツカヒ}はせなくなつた。さうして、染め上
りも、艶々しく、はでなものになつて來た。表向きは、かうした
色の禁令が、次第に行きわたつて來たけれど、家の女部屋までは、
官^{カミ}の目も届くはずはなかつた。

家庭の主婦が、居まはりの人を促したてゝ、自身も精勵してする
やうな爲事は、あて人の家では、刀自等の受け持ちであつた。若
人たちも、田畠に出ぬと言ふばかりで、家の中での爲事は、まだ
見^{マキリ}參^{マミエ}をせず^エにゐた田舎暮しの時分と、大差はなかつた。とり
わけ違ふのは、其家々の神々に仕へると言ふ、誇りはあるが、小

むつかしい事がつけ加へられて居る位のことである。外出には、下人たちの見ぬ様に、笠を深々とかづき、其下には、更に薄帛を垂らして出かけた。

一 イットキ時たゝぬ中に、婢 メヤツコ女ばかりでなく、自身たちも、田におりたつたと見えて、泥だらけになつて、若人たち十數人は戻つて來た。皆手に手に、張り切つて發育した、蓮の莖を抱へて、廬の前に竝んだのには、常々くすりとも笑はぬ乳母 オモたちさへ、腹の皮をよつて、切 セツながつた。

郎 イラツメ女様。御覽 ゴラウじませ。

豎 タツバリ帳を手でのけて、姫に見せるだけが、やつとのことであつた。

ほう——。

何が笑ふべきものか、何が憎むに値するものか、一切知らぬ上^{ジャウ}
 臍^{ラフ}には、唯常と變つた皆の姿が、羨しく思はれた。

この身も、その田居とやらにおり立ちたい――。

めつさうなこと、仰せられます。

めつさうな。きまつて、誇張した顔と口との表現で答へることも、
 此ごろ、この小社會で行はれ出した。何から何まで縛りつけるや
 うな、身狭^{ムサノチオモ}乳母に對する反感も、此ものまねで幾分、いり合せが
 つく様な氣がするのであらう。

其日からもう、若人たちの絲縊りは初まつた。夜は、閨の闇の中
 で寝る女たちには、稀に男の聲を聞くこともある、奈良の垣内住^{カキツ}
 ひが、戀しかつた。朝になると又、何もかも忘れたやうになつて

續^ウみ貯める。

さうした絲の、六かせ七かせを持つて出て、郎女に見せたのは、其數日後であつた。

乳母^{オモ}よ。この絲は、蝶鳥の翼よりも美しいが、蜘蛛の巢^イより弱く見えるがよ——。

郎女は、久しぶりでにつこりした。勞を犒ふと共に、考への足らぬのを憐むやうである。

刀自は、驚いて姫の詞を堰^{サク}き止めた。

なる程、此は脆^{サク}過ぎまする。

女たちは、板屋に戻つても、長く、健やかな喜びを、皆して語つて居た。

全く些^{スゴ}しの悪意もまじへずに、言ひたいまゝの氣持ちから、
田居とやらへおりたきたい――、
を反覆した。

刀自は、若人を呼び集めて、

もつと、きれぬ絲を作り出さねば、物はない。

と言つた。女たちの中の一人が、

それでは、刀自に、何ぞよい御思案が――。

さればの――。

昔を守ることばかりはいかついが、新しいことの考へは唯、
常^ネの婆の如く、愚かしかつた。
尋^{ヨソツ}

ゆくりない聲が、郎女の口から洩れた。

この身の考へることが、出来ることか試して見や。

うま人を輕侮することを、神への忌みとして居た昔人である。だが、かすかな輕^{カル}しめに似た氣持ちが、皆の心に動いた。

夏引きの麻生^{ヨフアサ}の麻を績^ウむやうに、そして、もつと日ざらしよく、細くこまやかに――。

郎女は、目に見えぬものゝさとしを、心の上で綴つて行くやうに、語を吐いた。

板屋の前には、俄かに、蓮の莖が乾し竝べられた。さうして其が乾くと、谷の澱みに持ち下りて浸す。浸しては晒し、晒しては水に漬^ヒでた幾日の後、筵の上で槌の音高く、こも／＼、交^{コモ}々々と叩き柔らげた。

その勤しみを、郎女も時には、端近くみざり出て見て居た。咎めようとしても、思ひつめたやうな目して、見入つて居る姫を見ると、刀自は口を開くことが出来なくなつた。

日晒しの莖を、八針ヤツハリに裂き、其を又、幾針にも裂く。郎女の物言はぬまなざしが、ぢつと若人たちの手もとをまもつて居る。果ては、刀自も言ひ出した。

私も、續ウみませう。

續ウみに續み、又續みに續んだ。藕ハスイト絲のまるがせが、日にく殖えて、廬イホリダウ堂の中に、次第に高く積まれて行つた。

もう今日は、みな月に入る日ぢやの——。

コヨミ曆の事を言はれて、刀自はぎよつとした。ほんに、今日こそ、氷ヒ

室ムロの朔ツイタチ日ぢや。さう思ふ下から齒の根のあはぬやうな悪感を覺えた。大昔から、曆ヒツリは聖の與る道と考へて來た。其で、男女は唯、長老トネの言ふがまゝに、時の來又去つた事を教ヲッはつて、村や、家の行事を進めて行くばかりであつた。だから、教へぬに日月を語ることは、極めて聰サトい人の事として居た頃である。愈々魂をとり戻されたのか、と瞻マモりながら、はらくして居る乳母であつた。唯、郎女マタは復、秋分の日の近づいて來て居ることを、心にと言ふよりは、身の内に、そくそくと感じ初めて居たのである。蓮は、池のも、田居タヅのも、極度に長タけて、荅の大きくふくらんだのも、見え出した。婢メヤツコ女は、今が刈りしほだ、と教へたので、若人たちは、皆手も足も泥にして、又田に立ち暮す日が續いた。

十七

彼岸中日 秋分の夕。朝曇り後晴れて、海のやうに深碧に凪いだ空に、晝過ぎて、白い雲が頻りにちぎれくに飛んだ。其が門渡トワタる船と見えてゐる内に、暴風アラシである。空は愈々青澄み、昏くなる頃には、藍の様に色濃くなつて行つた。見あげる山の端は、横雲の空のやうに、茜色に輝いて居る。

大山嵐。木の葉も、枝も、顔に吹きつけられる程の物は、皆活きて青かつた。板屋は吹きあげられさうに、煽りきしんだ。若人たちは、悉く郎女の廬に上つて、刀自を中に、心を一つにして、ひ

しと顔を寄せた。たゞ互の顔の見えるばかりの緊張した氣持ちの間に、刻々に移つて行く風。西から眞^{マト}正面^モに吹きおろしたのが、暫らくして北の方から落ちて來た。やがて、風は山を離れて、平野の方から、山に向つてひた吹きに吹きつけた。峰の松原も、空^ソの^ラ上^ザに^マ枝を搔き上げられた様になつて、悲鳴を續けた。谷から峰^ヲの^ヘ上^ノに^ボ生え上つて居る萱原は、一様に上へくと糶^セり昇るやうに、葉裏を返して扱^コき上げられた。

家の中は、もう暗くなつた。だがまだ見える庭先の明りは、黄にかつきりと、物の一つくを、鮮やかに見せて居た。

郎女様が――。

誰かの聲である。皆、頭の毛が空へのぼる程、ぎよつとした。其

が、何だと言はれずとも、すべての心が、一度に了解して居た。言ひ難い恐怖にかみづゝた女たちは、誰一人聲を出す者も居なかつた。

身狭乳母は、今の今まで、姫の側に寄つて、後から姫を抱へて居たのである。皆の人はけはひで、覺め難い夢から覺めたやうに、目をみひらくと、あゝ、何時の間にか、姫は嫗モロの兩腕兩膝の間に、居させられぬ。一時に、慟哭するやうな感激が來た。だが長い訓練が、老女の心を取り戻した。凜として、振り返る様な力が、湧き上つた。

誰タぞ、弓を――。鳴ツルウチ弦ぢや。

人を待つ間もなかつた。彼女自身、壁カベシロ代に寄せかけて置いた白

木の檀弓マユミをとり上げて居た。

それ皆の衆——。反閑アシブミぞ。もつと聲高コワダカに——。あつし、あ

つし、それ、あつしあつし……。

若人たちも、一人々々の心は、疾くに飛んで行つてしまつて居た。唯一つの聲で、警※ケイヒツを發し、反閑ヘンバイした。

あつし あつし。

あつし あつし あつし。

狭い廬の中を踏んで つた。脇目からは遶ネウダウ道する群れのやうに。

郎女様は、こちらに御座りますか。

萬法藏院の婢女メヤツコが、息をきらして走つて來て、何時もなら、許

されて居ぬ無作法で、近々と、廬ミギリの砌に立つて叫んだ。

なに――。

皆の口が、一つであつた。

郎女様か、と思はれるあて人が――、み寺の門カドに立つて居さつせるのを見たで、知らせにまゐりました。

今度は、乳母オモ一人の聲が答へた。

なに、み寺の門に。

婢女を先に、行道の群れは、小石を飛す嵐の中を、早足に練り出した。

あつし あつし あつし……。

聲は、遠くからも聞えた。大風をつき抜く様な鋭聲トゴエが、野面ノツラに傳

はる。

萬法藏院は、實に寂^{セキ}として居た。山風は物忘れした様に、鎮まつて居た。夕闇はそろく、かぶさつて來て居るのに、山裾のひらけた處を占めた寺庭は、白砂が、晝の明りに輝いてゐた。こゝからよく見える^{フタカミ}一の頂は、廣く、赤々と夕映えてゐる。

姫は、山田の道場の牕から仰ぐ空の狭さを悲しんでゐる間に、何時かこゝまで來て居たのである。淨域を穢した物忌みにこもつてゐる身、と言ふことを忘れさせぬものが、其でも心の隅にあつたのであらう。門の闕から、伸び上るやうにして、山の際^かの空を見入つて居た。

暫らくおだやんで居た嵐が、又山に　　つたらしい。だが、寺は物

音もない黄昏だ。タソガレ

男嶽ヲノカミと女嶽メノカミとの間になだれをなした大きな曲線タワが、又次第に
 兩方へ聳ソツつて行つてゐる、此二つの峰アヒダの間の廣い空際ソラギハ。薄れかゝ
 つた茜の雲が、急に輝き出して、白銀ハクギンの炎をあげて來る。山の
 間に充満して居た夕闇は、光りに照されて、紫だつて動きはじめ
 た。

さうして暫らくは、外に動くものゝない明るさ。山の空は、唯白
 々として、照り出されて居た。

肌 肩 脇 胸 豊かな姿が、山の尾上ヲノヘの松原の上に現れた。併
 し、梯に見つゞけた其顔ばかりは、ほの暗かつた。

今すこし著シルく み姿顯したまへ——。

郎女の口よりも、皮膚をつんぎいて、あげた叫びである。山腹の紫は、雲となつてタナヒ鬨き、次第々々に降る様に見えた。

明るいのは、山際ばかりではなかつた。地上は、砂の數もよまれイサゴるほどである。

しづかに しづかに雲はおりて来る。萬法藏院の香殿・講堂・塔婆・樓閣・山門・僧房・庫裡、悉く金に、朱に、青に、晝より著イチジルく見え、自ら光りを發して居た。

庭の砂の上にすれ〜に、雲は揺曳して、そこにあり〜と半身を顯した尊者の姿が、手にとる様に見えた。匂ひやかな笑みを含んだ顔が、はじめて、まともに郎女に向けられた。伏し目に半ば閉ぢられた目は、此時、姫を認めたとやうに、清しく見ひらいた。

軽くつぐんだ唇は、この女ニヨシヤウ性セイに向うて、物を告げてゞも居るやうに、ほぐれて見えた。

郎女は尊さに、目の低タれて來る思ひがした。だが、此時を過してはと思ふ一心で、御姿ミから、目をそらさなかつた。

あて人を讚へるものと、思ひこんだあの詞が、又心から迸り出た。

なも 阿彌陀ほとけ。あなたふと 阿彌陀ほとけ。

瞬間に明りが薄れて行つて、まのあたりに見える雲も、雲の上の尊者の姿も、ほの／＼と暗くなり、段々に高く、又高く上つて行く。

姫が、目送する間もない程であつた。忽、二上山の山の端かに溶け入るやうに消えて、まつくらな空ばかりの、たなびく夜になつて

居た。

あつし あつし。

足を踏み、前をサキ驅オふ聲が、耳もとまで近づいて來てゐた。

十八

當麻の邑は、此頃、一本の草、一ヒトク塊レの石すら、光りを持つほど、賑ひ充ちて居る。

タギマノマヒトケ當麻眞人家の氏神タギマヒコ當麻彦の社へ、祭り時に外れた昨今、急に、

氏上の拜禮があつた。故上總守老真人オユノ以來、暫らく絶えて居たことである。

其上、まう二三日に迫つた八月ハツキの朔日ツイタチには、奈良の宮から、勅使が來向はれる筈になつて居た。當麻氏から出られた大夫ダイフジン人のお生み申された宮の御代に、あらたまることになつたからである。廬堂の中は、前よりは更に狭くなつて居た。郎女が、奈良の御館からとり寄せた高機タカハタを、設タてたからである。機織りに長けた女も、一人や二人は、若人の中に居た。此女らの動かして見せる箴ヲサや梭ヒの扱ヒひ方を、姫はすぐに會得エトクした。機に上つて日ねもす、時には終ヨモスガラ夜織つて見るけれど、蓮の絲は、すぐに圓ツブになつたり、斷キれたりした。其でも、倦まずにさへ織つて居れば、何時か織りあがるもの、と信じてゐる様に、脇目からは見えた。

乳母は、人に見せた事のない憂はしげな顔を、此頃よくしてゐる。

何しろ、モロコシ唐土でも、天竺から渡つた物より手に入らぬ、とい

ふハスイトオ藕絲織りを遊ばさう、と言ふのぢやものなう。

話相手にもしなかつた若い者たちに、時々うっかりと、こんな事を、言ふ様になつた。

かう絲が無駄になつては。

今の間にどし／＼ウ續んで置かいでは——。

チオモ乳母の語に、若人たちは又、廣々とした野や田の面におり立つことを思つて、心がさわだつた。

さうして、女たちの刈りつた蓮積み車が、廬に戻つて來ると、何よりも先に、田居への降り道に見た、當麻の邑の騒ぎの噂である。

郎女様のお從兄イトコ惠美の若子さまのお母様ハラも、當麻真人のお出デぢやげな——。

惠美の御館ミタチの叔父君の世界、見るやうな世になつた。

兄御を、帥の殿に落しておいて、御自身はのり越して、内相のタイシ大師の、とおなりのぼりの御心持ちは、どうあらうなう——。

あて人に仕へて居ても、女はうっかりすると、人の評判に時を移した。

やめい やめい。お耳ざはりぞ。

しまひには、乳母が叱りに出た。だが、身狭刀自ムサノトジ自身のうちにも、もだ／＼と咽喉につまつた物のある感じが、残らずには居なかつた。さうして、そんなことにかまけることなく、何の訣やら知

れぬが、一心に絲を績^ウみ、機を織つて居る育ての姫が、いとほしくてたまらぬのであつた。

晝の中多く出た虻は、潜んでしまつたが、蚊は仲秋になると、益々あばれ出して来る。日中の興奮で、皆は正體もなく寝た。身狭までが、姫の起き明す燈の明りを避けて、隅の物陰に、深い鼾を立てはじめた。

郎女は、斷^キれては織り、織つては斷れ、手がだるくなつても、まだ梭^ヒを放さうともせぬ。

だが、此頃の姫の心は、満ち足らうて居た。あれほど、夜^{ヨル}々見て居た倅^{オモカゲ}人の姿も見ずに、安らかな氣持ちが續いてゐるのである。

「此機を織りあげて、はやうあの素肌のお身を、掩うてあげたい。」

其ばかり考へて居る。世の中になし遂げられぬものゝあると言ふことを、あて人は知らぬのであつた。

ちよう　ちよう　はた　はた。

はた　はた　ちよう……。

箴を流れるやうに、手もとにくり寄せられる絲が、動かなくなつた。引いても扱コいても通らぬ。箴の齒が幾枚も毀コボれて、絲筋の上にかゝつて居るのが見える。

郎女は、溜め息をついた。乳母に問うても、知るまい。女たちを起して聞いた所で、滑らかに動かすことはえすまい。

どうしたら、よいのだらう。

姫ははじめて、顔へ偏カタヨつてかゝつて來る髪の毛のうるさく感じた。箴の櫛目を覗いて見た。梭もはたいて見た。

あゝ、何時になつたら、したてた衣コロモを、お肌へふくよかにお貸し申すことが出來よう。

もう外の叢で鳴き出した、蟋蟀の聲を、瞬間思ひ浮べて居た。

どれ、およこし遊ばされ。かう直せば、動かぬこともおざるまい——。

どうやら聞いた氣のする聲が、機の外にした。

あて人の姫は、何處から來た人とも疑はなかつた。唯、さうした好意ある人を、豫想して居た時なので、

見てたもれ。

機をおりた。

女は尼であつた。髪を切つて尼そぎにした女は、其も二三度は見かけたことはあつたが、剃髪した尼には會うたことのない姫であつた。

はた はた ちよう ちよう。

元の通りの音が、整つて出て來た。

蓮の絲は、かう言ふ風では、織れるものではおざりませぬ。もつと寄つて御覽じ——。これかう——おわかりかえ。

當麻語部姥の聲である。だが、そんなことは、郎女の心には、問題でもなかつた。

おわかりなさるかえ。これかう——。

姫の心は、こだまの如く聴くなつて居た。此才伎テワザの經緯ユキタテは、すぐ呑み込まれた。

織つてごらうじませ。

姫が、高機に代つて入ると、尼は機陰に身を倚せて立つ。

はた はた ゆら ゆら。

音までが、變つて澄み上つた。

女鳥メトリの わがおほきみの織オリす機タ。誰タが爲タねろかも——、御存じ

及びでおざりませうなう。昔、かう、機ハタドノ殿の牕ハタドノからのぞきこ

うで、問はれたお方様がおざりましたつけ。——その時、その

貴いニヨシヤウ女性ヤウがの、

たか行くや 隼ハヤブサ別サワケの御被服料ミオスヒガネ——さうお答へなされたとな

う。

この中ヂユウ申し上げた滋賀津彦シガツヒコは、やはり隼別でもおざりました。
 天若日子アメワカヒコでもおざりました。天テンの日ヒに矢を射かける——。併し、
 極みなく美しいお人でおざりましたがよ。

截キりはたり、ちようちよう。それ——、早く織らねば、やがて、
 岩牀の凍る冷い冬がまゐりますよ——。

郎女は、ふつと覺めた。あぐね果てゝ、機の上にとろくとした
 間の夢だつたのである。だが、梭をとり直して見ると、

はた はた ゆら ゆら。ゆら はたゝ。

美しい織物が、箆の目から迸る。

はた はた ゆら ゆら。

思ひつめてまどろんでゐる中に、郎女の智慧が、一つの閼を越えたのである。

十九

望の夜の月が冴えて居た。若人たちは、今日、郎女の織りあげた
ヒトムラ一 反の上帛ハタを、夜の更けるのも忘れて、見讚ミハヤして居た。

この月の光りを受けた美しさ。

カトリ縑のやうで、カラオリ韓織のやうで、——やつぱり、此より外にはない、清らかな上帛ハタぢや。

乳母も、遠くなつた眼をすがめながら、譬へやうのない美しさと、
づゝしりとした手あたりを、若い者のやうに楽しんでは、撫でま
はして居た。

二度目の機は、初めの日數の半ナカラであがつた。三反ミムラの上帛ハタを織りあ
げて、姫の心には、新しい不安が頭をあげて來た。五反イツムラ目を織
りきると、機に上ることをやめた。さうして、日も夜も、針を動
した。

長月の空は、三日の月のほのめき出したのさへ、寒く眺められる。
この夜寒に、倅人の肩の白さを思ふだけでも、堪へられなかつた。
裁ち縫ふわざは、あて人の子のする事ではなかつた。唯、他人ヒトの
手に觸れさせたくない。かう思ふ心から、解いては縫ひ、縫うて

はほどきした。現^{ウツ}し世^ヨの幾人にも當る大きなお身に合ふ衣を、縫ふすべを知らなかつた。せつかく織り上げた上帛^{ハタ}を、裁^タつたり截^キつたり、段々布は狭くなつて行く。

女たちも、唯姫の手わざを見て居るほかはなかつた。何を縫ふものとも考へ當らぬ囁きに、日を暮すばかりである。

其上、日に増し、外は冷えて来る。人々は一日も早く、奈良の御館に歸ることを願ふばかりになつた。郎女は、暖かい晝、薄暗い廬の中で、うつとりとしてゐた。その時、語部^{カタリ}の尼が歩み寄つて来るのを、又まぎ／＼と見たのである。

何を思案遊ばす。壁^{カベ}代^{シロ}の様に縦横に裁ちついで、其まゝ身に纏ふやうになさる外はおざらぬ。それ、こゝに紐をつけて、肩

の上でくゝりあはせれば、晝は衣になりませう。紐を解き敷いて、折り返し被れば、やがて夜の衾にもなります。天竺の行カフヤウニンフスマ人たちの著る僧伽梨ソウギヤリと言ふのが、其でおざります。早くお縫ひあそばされ。

だが、氣がつくと、やはり晝の夢を見て居たのだ。裁ちきつた布を綴り合せて縫ひ初めると、二日もたゝぬ間に、大きな一面の綴りの上帛ハタが出来あがつた。

郎女様は、月ごろかゝつて、唯の壁代をお織りなされた。

あつたら 惜しやの。

はりが抜けたやうに、若人ワカウドたちが聲を落して言うて居る時、姫は悲しみながら、次の營みを考へて居た。

「これでは、あまり寒々としてゐる。モガリ殯の庭の棺ヒツギにかけるひしきもの―喪氈―、とやら言ふものと、見た目にかはりはあるまい。」

二十

もう、世の人の心は賢しくなり過ぎて居た。獨り語りの物語りなどに、信シンをうちこんで聴く者のある筈はなかつた。聞く人のない森の中などで、よく、つぶくと物言ふ者がある、と申うて近づくと、其が、語部の家の者だつたなど言ふ話が、どの村でも、笑ひ咄のやうに言はれるやうな世の中になつて居た。タギマノカタリベ當麻語部の嫗

なども、都の上ジャウラフ 藹アの、もの疑ひせぬ清い心に、知る限りの事を語りかけようとした。だが、忽違つた氏の語部なるが故に、追ひ退ノけられたのであつた。

さう言ふ聽きてを見あてた刹那に、持つた執心の深さ。その後、自身の家の中でも、又廬イホリダウ堂ダウに近い木立ちの陰でも、或は其處を見おろす山の上からでも、郎女に向つてする、ひとり語りは續けられて居た。

今年八月、當麻の氏人に縁深いお方が、めでたく世にお上りなされたあの時こそ、再オソ己ニが世が來た、とほくそ笑みをした——が、氏の神祭りにも、語部を請シヤウじて、神語りを語らさうともせられなかつた。ひきついであつた、勅使の參向の節にも、呼び出されて、

當麻氏の古物語りを奏上せい、と仰せられるか、と申うて居た豫^ア期^{ラマシ}も、空頼みになつた。

此はもう、自身や、自身の祖^{オヤ}たちが、長く覚え傳へ、語りついで來た間、かうした事に行き逢はうとは、考へもつかかなかつた時代^{トキヨ}が來たのだ、と思つた瞬間、何もかも、見知らぬ世界に追放^{ヤラ}はれてゐる氣がして、唯驚くばかりであつた。娛しみを失ひきつた語^カ部^{タリベ}の古婆は、もう飯を喰べても、味は失うてしまつた。水を飲んで、口をついて、獨り語り^{ウハゴト}が囃^{ウハゴト}語のやうに出るばかりになつた。

秋深くなるにつれて、衰への、目立つて來た姥は、知る限りの物語りを、喋りつゞけて死なう、と言ふ腹をきめた。さうして、郎

女の耳に近い處をところをと覓めて、さまよひ歩くやうになつた。

郎女は、奈良の家に送られたことのある、大唐の彩色エノゲの數々を思ひ出した。其を思ひついたのは、夜であつた。今から、横佩墻内へ馳けつけて、彩色エノゲを持つて還れ、と命ぜられたのは、女の中に、唯一人残つて居た長老オトナである。つひしか、こんな言ひつけをしたことのない郎女の、性急な命令に驚いて、女たちは復、何か事の起るのではないか、とおどくして居た。だが、身狭乳母ムサノチオモの計ひで、長老オトナは澁々、夜道を、奈良へ向つて急いだ。

あくる日、繪具エノグの届けられた時、姫の聲ははなやいで、興奮ハヤりに響いた。

女たちの噂した所の、袈裟で謂へば、五十條の^{ダイエ}大衣とも言ふべき、
 藕絲グウシの上帛の上に、郎女の目はぢつとすわつて居た。やがて筆は、
 愉しげにとり上げられた。線描スミガきなしに、うちつけに繪具エノグを塗り
 進めた。美しい彩畫タミエは、七色八色の虹のやうに、郎女の目の前に、
 輝き増して行く。

姫は、緑青を盛つて、層々うち重る樓閣伽藍の屋根を表した。數
 多い柱や、廊の立ち續く姿が、目メカ赫マヤくばかり、朱で彩タみあげら
 れた。むらくくと鬢くものは、紺コン青ジャウの雲である。紫雲は一筋
 長くたなびいて、中央根本堂とも見える屋の上から、畫カきおろさ
 れた。雲の上には金泥コンデの光り輝く靄が、漂ひはじめた。姫の命
 を搾るまでの念力が、筆のまゝに動いて居る。やがて金コン色ジキの雲ウ

氣は、次第に凝り成して、照り充ちた色身——現し世の人とも見えぬ尊い姿が顯れた。

郎女は唯、先の日見た、萬法藏院の夕の幻を、筆に追うて居るばかりである。堂・塔・伽藍すべては、當麻のみ寺のありの姿であつた。だが、彩畫の上に湧き上つた宮殿樓閣は、兜率天宮のたゞずまひさながらであつた。しかも、其四十九重の寶宮の内院に現れた尊者の相好は、あの夕、近々と目に見た倂びとの姿を、心に覓めて描き顯したばかりであつた。

刀自・若人たちは、一刻々々、時の移るのも知らず、身ゆるぎもせず、姫の前に開かれて來る光りの霞に、唯見呆けて居るばかりであつた。

郎イラツメ女が、筆をおいて、にこやかな笑エマひを、圓マロく跪ツイキ坐る此人々の背におとしながら、のどかに併し、音もなく、山田の廬堂を立ち去つた刹那、心づく者は一人もなかつたのである。まして、戸口に消える際キハに、ふりかへつた姫の輝くやうな頬のうへに、細く傳ふものゝあつたのを知る者の、ある訣はなかつた。

姫の倂びとに貸す爲の衣に描いた繪エヤウ様は、そのまゝ曼陀羅スガタの相を具へて居たにしても、姫はその中に、唯一人の色シキシン身の幻を描いたに過ぎなかつた。併し、残された刀自・若人たちの、うち瞻マモる畫面には、見るく、數千地涌スセンヂユの菩薩の姿が、浮き出て來た。其は、幾人の人々が、同時に見た、白日夢ハクジツムのたぐひかも知れぬ。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 第廿四卷」中央公論社

1967（昭和42）年10月25日発行

初出：「日本評論 第十四卷第一〜三号」

1939（昭和14）年1〜3月

※踊り字（／＼、／＼、／＼）の誤用は底本の通りとしました。

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2009年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死者の書

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>